

トマス・ハーディ「1912—13年の詩  
—古き<sup>ほむら</sup>焰があと—」

藤 田 繁 訳・注

旅立ち

なぜあの夜知らせてくれなかったのか  
あけがた卒然と  
まるで何んでもないかの如く静かに  
この世の契りを閉じて逝ってしまうなんて  
燕の翼でも  
追ってゆけないところへ  
ああ 今ひとたび君の姿を見たくとも

さよならも言わず  
そっと呼んでもくれず  
ひとことお話をと求めもせず その間わたしは  
壁に白みゆく朝を見ていた  
冷然と 何も知らず  
そのとき君の死出の旅が始まって  
全てを変えてしまっていたのに

なぜ君はぼくを家から連れ出し  
たそがれどきに君がよくいた  
大枝さし交す並木道の果てに  
見えるは君としばし思わせて  
あげ句にわたしを苦しめるのか  
じっとり深まりゆく暗がりの  
通景消えるところ口をあけるは空白ばかり

君は西の方<sup>かた</sup>はるか赤き脈浮ぶ  
 岩壁近くに住まえる女<sup>ひと</sup>であった  
 君は海にそそり立つビーニィの絶壁を  
 馬駆けた白鳥<sup>うなじ</sup>の項せるひと  
 わがかたえに馬とめて  
 不思議のまなざしでわたしを見た  
 ああそのとき「人生」は最高の姿をぼくらに見せていたので  
 あった

ならばなぜぼくらは話さなかったのか  
 死して永きあの日々のことを思い  
 君が逝く前になぜ求めなかったか  
 かの時の再生を？　ならばこうも言えたかもしれぬ——  
 「かくもうるわしき春  
 共にとめゆかん  
 かつてわれらが訪ねしところを」

まあ　いい！　覆水は盆にかえらぬもの  
 変えることはできぬ　仕方のないこと  
 わたしは水葬をまつ死者  
 やがて水中に没する身……だがああ　君は知るまい  
 あんなに急に旅立つことが  
 ——誰が予測できたろう  
 私でさえ——わたしをかくもたたきのめすとは！

1912年12月

### 最後の遠出

ここだ　ヒースの道を帰ってきた君は  
 前方に浮ぶドーチェスターの灯りを見た  
 かんばせは灯影に映えて——一週間のち  
 それが死者の顔になろうとは夢知らず  
 君は語った　二度と君に輝くことのない

後光さす眺めの美しさを

それから君は左手に通過した  
八日ののち葬られ  
今は亡き人と言われる所を  
無縁のものと何気ない目で眺めながら  
その木の下でもうすぐ  
とわの休息をとることになっていたのに

ぼくは君とドライブはしなかった……だが仮に  
あの夕べ君の側に座っていても  
ゆらぐ光に照らされた君の顔に  
最期の表情を窺い知ることはなかっただろう  
そこに記された言葉を読みとることもなかった——  
「わたしもうすぐ安らぎの地に参ります

あなたは淋しく思われるかもしれません  
でも そこに幾たび訪れて下さるのか  
何をお考えになるのか それとも全くおいでにならないのか  
私の知ったことではありませんし 知りたくもないでしょう  
たとえわたしを非難なさっても気にとめないでしょう  
おほめの言葉さえ もはや不要のこと」

然り 君は知ることもないし 気にも留めまい  
しかし だからといって君を軽んじるだろうか  
いとしき霊よ 「なんの利が」などといって私が動いたことが  
あったろうか？  
とはいえ事態は同じまま まことに——  
愛 賞讃 無関心 非難の彼方に君は行ってしまったのである  
る

## 散歩

最近は丘の上の木まで  
 ぼくと散歩することはなかった  
 木戸道を通り  
 若い頃のように。  
 君は弱って足がままならず  
 だから決して来なかったんだ。  
 ぼくはひとりで出かけ気にもしなかった  
 後に残した君のことなど考えもしなかった。

今日ぼくはあの頂きに登った、  
 前と全く同じように。  
 またひとりで  
 四方を眺めた、  
 見なれた風景を。  
 では どんな違いが？  
 そこから帰ったときの部屋の表情を  
 心の底で感じていたことだけ。

## 墓うつ雨

<sup>むらぐも</sup>群雲があのひとに  
 激しく水を吐く  
 無情に貶しめて——  
 ついこの前まで  
 かくも冷たくつきさす  
 雨の矢をうければ  
 恥辱にふれたように  
 苦痛で身ぶるいした  
 あのひとに

<sup>らいうんくろ</sup>雷雲 黝ずみ

鳥くちばし閉じるとき  
 埃の舗装せる小川に  
 夏がばら撒く  
 驟雨に叩かれると  
 華奢な頭を<sup>こうべ</sup>  
 まもるべく  
 ためらいがちに踏み出す足を  
 一足ごと早めたあのひとに

わたしがあちらにいて  
 あのひとがこちらで護られていたなら！  
 それとも更にいいことは  
 共にむこうに葬られて  
 一つ天氣に曝されること——  
 もっともよき季節に  
 かの地に日照れば  
 はた夕べ澄明なるとき  
 ふたりで散歩もしましょうに

やがてあのひとの奥津城より  
 緑の葉萌え出で  
 この世の星のごと  
 雛菊わき出で  
 かのひとその一部となる  
 そう——その美しい心に  
 いまわのきわまで  
 幼な子の歡喜もて  
 無量の愛捧げた花たちの

1913年1月31日

われかの地にかの人見出したり  
 われかの地にかの人見出したり、

塩の刃つけたる風にむかいて  
 西になだれる  
 知られざる陵丘の地に。  
 紫の浜に  
 大海砕け  
 不動の大地を  
 ハリケーンゆるがすところ。

われかの人この地に連れ来り  
 近くに波うつことなき  
 無音のねぐらに  
 葬りたり。  
 そのロームの小部屋にて、  
 かの人ながく耳にし  
 ふかく愛せし潮騒に  
 もはや乱さるることなからん。

かくてかのひとは  
 大西洋襲い  
 盲目の疾風<sup>はやて</sup>吹きすさぶ  
 霊歩むかの丘<sup>きゆうそく</sup>側に寝ねず。  
 そこより名にしおうダンダジェルが岬を  
 眺めたるは幾たびぞ、  
 海に沈む太陽かの人のかんばせを  
 火の如く染めいし。

波の下なるライオネスが物語に  
 溜息つかるることもありき。  
 その間風に引かれたる一房の金髪が  
 殻竿のごとくかの人を頬を叩ける。  
 はたまた思いに額をしばられて  
 数マイルかなたの潮騒に  
 耳を傾けし時もありき。

今は遠くはなれてかの人へ眠る。

なれど恐らく かの人の亡霊は  
地中を這いゆきて、  
かつて住まえる所で  
みちてはすすりなく  
西の海の  
潮の音を聞き、  
幼な子の心もて  
海の鼓動に歓喜せん。

さよならも言わないで

客や友だちや身内が帰るとき  
一言もなしに姿を消しているのが  
君のくせだったね  
送り出したあと大急ぎで引返すと  
思った通り 君はいたね

どこかに たとえばロンドンに  
出たいと思えば  
突然行ってしまうのが君  
ぼくがそんなこと思いもせず  
君のトランクが降ろされていることさえ気づかないうちに

だから いつもの早業で  
永遠に君が消えてしまった今  
ぼくには思えるんだ  
今度も君は同じつもりなんだ——  
「さよならなんて言わなくても！」

## 哀 歌

園遊会 今日あれば  
 彼女はどんなに喜んだことか！——  
 艶<sup>あで</sup>やかな帽子に手袋をつけ  
 芝生には 椅子に  
 馳走山積みのテーブルと盆  
 ようこそおいで下さいましたと  
 笑みを満面にうかべて…だが  
 彼女は閉ざされている  
     友垣の魅力から  
     小さな殻の  
     牢獄に閉じ込められて

晩餐会 今宵あれば  
 彼女は女王であつたろう  
 偽りのない熱意と  
 寛やかな喜びの心をもって  
 家にあるものすべてを  
 おしげもなく客に  
 賜ったことだろう…だが鳴々  
 彼女は草の下に閉ざされている  
     酒杯あふれざるところ  
     宴の様子も  
     え知らず

子供のように目をこらして  
 彼女は探したことだろう  
 新年がめぐって咲いた  
 内気なユキノハナを  
 はたまた時は聖燭祭  
 クロッカスをもとめて  
 霜の中を見つめただろう…もしも



一番すきだった光景も忘れ  
 永遠の休息に  
 すっかり魅入られ  
 涅槃に入っていなければ

浮かれ騒ぎも  
 彼女があんなに喜び  
 わたしたちと違って  
 決してあきることのなかった饗宴も  
 ぼくらは好まない  
 そんなわたしたちがこちらにいて  
 生気のない道具に囲まれている…なのに  
 彼女は閉ざされている  
 人々の歓声から  
 ひとが何をしようと言おうと知らず  
 イチイの天蓋の床<sup>とこ</sup>に

ひょう  
憑 霊

わたしが夜毎ここに来てるのをあの方は御存知ないのです。  
 何か思いついてあの人が行くところへ  
 わたしもすかさずやって参りますこと、  
 どうすれば知ってくれますかしら？——  
 昔のようにあの人から  
 二三尺離れてうろうろしておりますのに  
 わたしにかけて下さる言葉にお返事できません——  
 ただ聞くだけです！

わたしがお返事できたときはそんなお言葉を下さらなかった。  
 ぜひ旅に御一緒したいと  
 気持をお伝えできたときは  
 滅多にあの人は出たがりませんでした。  
 いま前よりもずっと

わたしと旅に出たいと思っていらっしゃるのに  
あの方には忠実な亡霊が見えません。  
話しかけていらっしゃるのに。

そうです、夢みる人だけが知っている所へ  
あの人のお伴をします。  
こわがりの野兎が長い足跡をのこしている所へ、  
みやま鳥が夜帰る所へ、  
あの人にとって過去しかない古い側廊へ、  
あの方の影のようにぴったりと。  
ただあの人に呼びかけることはできません  
手の届くほど近くにいますのに。

おお、あの人に伝えてよ、わたしがどんなに誠実な亡霊である  
か、を。  
疾く知らされよ、  
わたしに死なれてからあの人が溜息の一つも漏らせば  
直ちにはせ参じます、と。  
つたえてよ、忠実なるものが  
愛の出来うる限りをつくしていると。  
あの方の道がまだ辿る<sup>あた</sup>価値があるように、  
その道に安らぎをもたらすべく。

## 声

呼ぶよ、呼ぶよ、死んだ女がさびしい男に。  
——あなたのすべてではなくなった、  
生前のわたしと今はちがうわ。  
晴れやかな 出会いの時のわたしよ。

聞こえているのはいったい君の声なのか？ ならば 姿を見  
せてよ。  
ここに立っておくれ、わたしを待っていていた

街に近づいた時のように。いや あの時のまま、  
あの空色の服までもそのままに。

それとも 濡れた<sup>まきば</sup>牧場を渡ってくる  
ものうい ただの風なのか？  
君はとけて青白い不在になり  
遠く 近く 二度と声を聞くことはできないのか？

かくてわたしは よろよろと歩いている。  
まわりに木の葉ふり  
北風がさんざしの垣からうすく滲みでて——  
女が呼んでいる。

1912年12月

### 彼の訪問者

月影が薄れゆく頃メルストックのお墓からやって参ります。  
二十年以上あなたと暮した所を見に。  
夜明けの郵便列車が通過する時においとましますが、  
あの長いドアは開けておいて下さらなくても結構です、  
生前のように。

わたしの住居はなんと変ってしまったことでしょう！  
雛菊のあった所は幾何学的な花壇になり、  
部屋はみんな塗り変えられ絵もかわってしまった。  
カップと受皿は別もの、お茶を楽しむ所もなくなった、  
わたしが居た時のように。

眠りほうけた召使たちの顔がぼんやり見えます。  
病めるときも健やかなるときもわたしに仕えてくれた人達で  
はなくて、  
わが家のしきたりを心得ない全くの他人です。  
わたしが絵をかくのを見たこともなければわたしがそっと歌

うのを聞いたこともない人たち、  
ここに流れた歌を。

ですから この飾り直した家に長居したくありません。  
以前と全く違う様子を見ますと落ち着きません。  
メルストックに帰って、二度とここには戻りません。  
もの言わぬ沢山の霊が棲む沈黙の世界に帰ります、  
昔の人たちの棲む。

1913年

### 一枚のちらし

「法定代理人」として  
わたし宛でない信書を読んだ——  
本発信人は以下の新作服を提供できます  
色も御覧の通り

描かれたるは ブラウスに茶会服  
豪華裳裾つき拝謁服  
魅惑の舞踏会ドレスに婦人帽  
最新流行の保証つき

そも この麗々しく描かれた春の「流行」は  
いかな貴婦人に呼びかくるものぞ？  
こぞの年ひきぎわに  
経帷子で装いしかのひとに

### 夢かあらずか

なぜセント・ジュリオットに行くのか？わたしにとってそこは  
何なのか？  
得体のしれない巫術が  
わたしにかけられただけなのだ、

わが人生の多くをとく鍵はかの地なりと思うのは。

そうだ わたしは何度も夢をみた、<sup>さいほう</sup>西方のあの地を、  
そこに隠れるように  
住んでいる乙女を、  
美しい目と白い肩、広い額と房なす栗色の髪を。

遠い昔のある夜 海に向って旅をしていたわたしは  
かの地にあの人を見つけた。  
ひとり海の鳥にかこまれて  
近くのものしか知ろうとしないひとであった。

かの地であのひとはあんなにかぐわしく過していたので(私には  
いまもそう思える)、  
直ちに魅了され  
そのひとをわがものとして  
長い年月を共にせんと欲した。そんな夢を見てきたのである。

だが今わたしには セント・ジュリオットからきたあの乙女の  
姿が見えぬ。  
あのひとは一体ここにいて  
ここで命の輝きを放っていたのであろうか、  
長くわたしの伴侶と思っていたあの<sup>ひと</sup>女は？

そもそもセント・ジュリオットなどという地が存在するのであ  
ろうか？  
あるいはせせらぎ沿いの径を木の葉おおえる  
ヴァレンシィ谿谷なるものが、  
はたビーニィや、霧のひだ飾りせるボスの断崖は？

1913年2月

## 旅にきて

ここに私は声なき御<sup>みたま</sup>霊に会いに来た。

どこへ おお どこへわたしをつれてゆくのか 気まぐれ  
な霊よ？

崖を上り 下り わたしは道に迷って 独りとり残され  
見えない波の絶叫におびえている。

つぎはどこに君は現われて振り向くのか、

到るところ周りいずこをみても

栗色の髪に

グレイの瞳 バラ色さしては消える頬の君は。

そうだ 遂にわたしは君がむかしさまよったくににまた入った。

過ぎた歳月を 死せる情景の中を あなたを追ってここま  
できた。

君はいまぼくらの過去について何かいいたいことを見つけた  
か――

わたしが君を見失った暗い時空を眺めわたして？

夏は幸せをくれたが 秋は不和であったと？

わたしたち二人の人生は

はじめほど終りはよくなかったとでも？

だが いまはすべてが終った、「時」の嘲笑にもかかわらず。

君が何をしているのかわかっている――ぼくを案内してるの  
だね。

一緒にここを彷徨したとき知った所へ。

折よく晴れた日のあの美しい時刻に

霧の虹が煌いていた滝、

それからその下の洞窟へ。そこにとよもした声は今もこだまし  
て

四十年前からわたしに呼びかけているよう。

あの頃君は光り輝やき

いまわたしがよろよろと後に従っている影うすき亡霊ではなかった！

ここを通っているものに気がつかず

目覚めた鳥は羽をつくろい 海豹はたいぎに身をおこす。  
いとしき霊よ、もうすぐ君はわたしから消えねばなるまい。

星は鎧戸をおろし おぼろに夜は白んできた。

信じてくれ、「人生」が顔を顰めても、

ここに連れてきてくれたことを厭うてはいぬ。否、わたしを  
また連れてきておくれ！

ぼくらの日々が歓びであり ぼくらの道が花原を貫いて  
いた、

かのときとわたしは変ってはいぬ。

ペンターガン入江にて。

### みまかれし日を思い出でて

ビーニィは震えざりし

ジュリオットは灰色にならず  
水すくなきヴァレンシィの流れは  
常と変わらず

ボス是一片の挽歌さえ  
歌うにみえず

ターガンは泡だつ寄せ波に  
ひとことさえ嘆けるや

彼ら気を払わず

関心なくかのひとの御魂  
逝けるときを過せども

生の花咲ける頃かのひと  
この地を求めいとしまれたり――

都邑に閉塞されたるとき  
彼らの寂しい顔に幾たびぞ

み心切に憧れたる

なにゆえヴァレンシィは  
 哀悼をせせらぎに托さざりしや  
 その澄める流れの源は  
 常にかのひとの彷徨える所なりしに？  
 なにゆえボスは雷鳴せず  
 ターガンは悟らざりしや  
 古き友の体と息が  
 別れしときに？

## ビーニイの崖

1870年3月—1913年3月

### 一

おお オパールとサファイア色せる地の果て<sup>さいかい</sup>西海よ  
 輝やける髪弄放<sup>ひと</sup>に天駆ける馬上の女よ——  
 われ切に愛しわれに愛尽せし女よ

### 二

青白き鷗ら足下に哀鳴し 波濤は遙か  
<sup>げてん</sup>下天にやむことなき喧嘩にふけるとき  
 われらは崖<sup>がいじょう</sup>上にありて心も軽く笑いたり  
 かの晴れたる三月の日

### 三

ひとひらの雲かのときわれらを包み そこに虹の雨舞いたち  
 大西洋の<sup>みなも</sup>水面ににぶき醜形の影落つ  
 それから太陽再び耀き出で 大海は紫にきらめけり



## 四

——今も美<sup>うるわ</sup>しき亀裂もてビーニィは昔のごとく空にそびえたつ  
 ならば やがて三月 かの女<sup>ひと</sup>とわれ再びその地にゆきて  
 かの三月に交しし甘き言葉を新たに語りあわざるべきか や  
 がては？

## 五

今なお美しき亀裂もてかの猛く不気味なる岩壁そびえるもい  
 かにせん  
 愛馬ゆるやかに運びしかの女<sup>ひと</sup>はいま——いずちゆきけ——  
 ビーニィを知らず 構<sup>かま</sup>わず 二度とその地で笑むことなから  
 ん

## カースル・ボテレルにて

小径と街道の交わる所へくると  
 遊覧馬車は糖雨でぬれそばっている。  
 ふり返って遠ざかる脇道をみれば  
 ぬれて光っている坂に  
 いまもはっきりと見える、

晴れた三月の夕べ ゆき暮れた  
 わたしと若い女の姿が。二輪馬車の側を  
 ぼくらは登っているのだ。あの強い小馬が  
 喘いで足をゆるめたので  
 負担にならぬよう降りたばかりだった。

登りながらぼくらが何をし何を話したかは  
 大したことではない。その結果さおも——

大切なことは、希望が死に感情が消え去るまでは  
 よほどのことがないかぎり  
 人生が必ず獲得するあるもの。

わずか一分の出来事であった。がその丘の物語で  
 あれほど価値ある一時<sup>ひととき</sup>が 後にも先にもあったろうか？  
 否、或る人間には決して。早足であるいは痛み足で  
 その道を登ったものが  
 何千人いようと。

道の辺を峻しく縁どる原初の岩々よ、  
 お前たちは地球の歴史の変遷を  
 たっぷりと眺めてきた、アルパもオメガも。  
 だが岩が色と形で記録するもの  
 ——それはわれら二人がそこを通過したこと。

「時」は容赦なく無慈悲に  
 心ない機械の如く 風景から  
 実体をかき消してしまったが  
 私には その坂にいまなおとどまる幻の姿がみえる。  
 あの夜が目撃した輝やくぼくらのままに。

坂道に立つ幻影は小さく小さくなってゆく。  
 雨中のそのひとをわたしは見つめつくす、  
 これが最後と。わたしの時<sup>じ</sup>砂は残り少なく、  
 むかしの愛のくにを旅することはもはやないから  
 二度と。

1913年 3 月

## 場所

誰もいわない。ああ、あそこだよ、  
 なん十年も前あの谷間で、

三つの町の誰一人知ろうとしなかったこと——  
 華のような女の子が生まれた所は。  
 後にも先にも、あの家で生まれた一番美しい子だよ、と。  
     だが、遠い昔のあの日に  
     ほんとうに起こったこと。

誰も思わない。あそこなんだ、その子が  
 鋤<sup>ホ</sup>岬かたえの一室に 花の蕾のように横たわって  
 ——ちょうど就寝直後の時刻だった——  
 詩篇百十三歌の古雅なしらべを  
 たどたどしく奏ていた鐘の音を聞いたのは。  
     聖アンデレ教会の塔から  
     夜も朝も昼も鳴り渡った鐘の声を。

誰も思い出さない。馭者が齒止めをかける  
 このボテレルの丘で、  
 真盛りの新鮮な果実よりも生き生きと頬紅潮せる娘が、  
 恐怖もものかは落馬せんと決めているかのように  
 馬で駆けおりたことを。  
     (決して落ちはしなかったが)  
     ひとは啞然と見るばかり。

否、ひとりいる。誰も思い出さない  
 これらのことに、  
 現実の場景に欠けている趣きと  
 実在以上の存在を感じる者が。  
 その男にとって「今日」は座礁して生氣なく  
     せわしいその語りは  
     ただの気のぬけた話。

1912年3月、プリマスにて

## 馬に騎る幻影の女

## 一

わたしの知っている男<sup>ひと</sup>は妙な習性をもつ。  
悩みやつれて気がふれたように  
やってきて立ち  
砂浜と  
海の靄を見つめる。  
手も顔も  
まなざしも動かず。  
それから背をむけて行ってしまう。  
あんなに目を凝らして何を見てるのだろうか？

## 二

人の話では 今日よりもっと鮮やかに  
眼前のこととして見ているらしい。  
あの塩風吹く<sup>くさはら</sup>草原で  
かつて演じられた  
甘く優しい情景を。  
そう、いつも心に刻んでいる。  
温かい血のかよった実在のものとして  
過ぎた年月がもたらすもの——  
自ら思い描く幻の姿を。

## 三

彼の幻影についてひとは更にいうだろう。  
あの人が見るのは  
あそこだけではない。  
頭の中  
あらゆるところで——昼も夜も

輝やくバラ色の光で  
 空中に描かれたかのように——  
 そう、あの浜から遠く離れて  
 彼はずっとこの幻影を曳いているのだ、と。

#### 四

馬に騎る幻の女の姿を。労苦に苛まれ  
 日ごと男は衰えるけれども  
 「時」は女に手を触れず  
 彼の恍惚の思いの中で  
 あの灌木生うる峨々とした  
 大西洋の断崖を  
 娘はいまも楽しげに馬を駆っている。  
 初めて見たときのように  
 手綱を引き波の律動にあわせて歌っている。

#### 薔薇の呪い

「いずれ僕は館を建てるつもりです。  
 それに塔を二つ付け  
 広い階段は欄干柱で飾り  
 水晶の水が湧く冷たい井戸を掘ります。  
 そうです、いずれぼくは館を建て、  
 愛の糧となるバラを植えます。  
 林檎と梨の木も。」

あの人は屋形の建設にとりかかり  
 それに塔を二つ付け  
 広い階段を欄干柱で飾り  
 水晶の水が湧く冷たい井戸を掘りました。  
 あの子はわたしのためにあの屋形を建て  
 沢山の木を植えました。

でもバラは何処にも。

あの人が愛の花をつける  
 バラは一本も植えなかったので、  
 他の花は栄えたけれど  
 何か心に毒が流し込まれてわたしたちの魂を裂きました、  
 あの人がバラを植えなかった時から。  
 誤解ゆえのおぞましい諍かいが生じ  
 苦悶することになったのです。

「この不幸はわたしが治しましょう」と申しましたのはそれ  
 ゆえ。

かくて丑三つ刻に  
 外に出て 人知れず  
 何ものもわたしたちの魂を裂くことのないよう  
 バラを一株植え、わたしは祈った。  
 「薔薇よ、厭しい歪んだ不仲と  
 胴枯れ病の長き日々を止めよ」

でもわたしは黄泉より召された——そう  
 わたしのバラが育つ前に召されたのです。  
 わたしは今知りたい、  
 わたしが植えたバラをあの人はどう思っているのか  
 わたしが召されて亡霊になったあと  
 あの人はいまだ  
 昔のように心を捧げてくれたかどうか！

多分いま頃あの木の女王は咲き誇っているでしょう  
 植えただけで成長は見えていませんが。  
 そしてあの方は輝く花の側で——  
 わたしを見えなくしていた白内障が落ちて——  
 そう、あの木の女王の側で  
 昔のままのわたしを見ていることでしょう

見えるといわれても遅すぎますが！

## セント・ローンシズ再訪

時よ 戻れ！  
 だが またわたしは近づいている  
 若き頃と同じく 灰色に  
 聳える城砦へ

近くでほほえむ  
 宿で——なぜだろう ここも  
 希望と双子であったわたしが  
 訪れたときと変ってしまったのは？

この旅籠で見つけた  
 馱者と瘦馬は朽ちて土になった  
 宿の亭主も冥界に入った  
 酒場の女もいまは異界のひと

この宿で  
 恋しい家まで  
 道中わたしを運んでくれる  
 馬と人を雇った

海辺の人たちの顔にむかって  
 旅を続けるうちに  
 宵闇が迫って  
 ついにあの住居が現れた

もし再び  
 大西洋のかの地に疾駆すれば  
 あの人たちは今もいるだろうか  
 あの時のように<sup>しか</sup>確と？

なぜ空しい思いを抱くのか  
あの人たちが地下に消えたことは  
百も承知ではないか ああ追放されて  
無の世界へ永遠に！

### ピクニックの跡

去年の夏  
海に開けた丘の  
小枝と荊棘で  
焚火をした所へ  
ゆっくりとわたしは  
冬のねかるみを登る  
見ると一目で  
わたしたちが後にした  
場所がわかる

今は冷たい風が吹き  
草は灰色だが  
いま尚そこは  
焦げた円の形をしている  
炭になった棒切れが  
わたしの立っている  
草原にいまも散らばっている  
わたしはあの日やって来た  
一行の最後の遺物！

そう 去年と全く変わらず  
わたしはここにいる  
海は奇妙な直線から  
この丘へ相かわらず  
潮風を吹きつけてくる  
わたしたち四人が来たときのように



——だが二人はこの草の丘から  
ピクニックとは無縁の  
都会の喧騒へ  
遠く去っていった  
そして一人は——目を閉じた  
永久に

## POEMS OF 1912-13

*Veteris vestigia flammae*277 *The Going*

WHY did you give no hint that night  
 That quickly after the morrow's dawn,  
 And calmly, as if indifferent quite,  
 You would close your term here, up and be gone  
     Where I could not follow 5  
     With wing of swallow  
 To gain one glimpse of you ever anon!  
     Never to bid good-bye,  
     Or lip me the softest call,  
 Or utter a wish for a word, while I 10  
 Saw morning harden upon the wall,  
     Unmoved, unknowing  
     That your great going  
 Had place that moment, and altered all.  
 Why do you make me leave the house 15  
 And think for a breath it is you I see  
 At the end of the alley of bending boughs  
 Where so often at dusk you used to be;  
     Till in darkening dankness  
     The yawning blankness 20  
 Of the perspective sickens me!  
     You were she who abode  
     By those red-veined rocks far West,  
 You were the swan-necked one who rode  
 Along the beetling Beeny Crest, 25  
     And, reining nigh me,  
     Would muse and eye me,  
 While Life unrolled us its very best.  
 Why, then, latterly did we not speak,  
 Did we not think of those days long dead, 30  
 And ere your vanishing strive to seek  
 That time's renewal? We might have said,  
     'In this bright spring weather  
     We'll visit together  
 Those places that once we visited.' 35

Well, well! All's past amend,  
 Unchangeable. It must go.  
 I seem but a dead man held on end  
 To sink down soon. . . . O you could not know  
     That such swift fleeing  
     No soul foreseeing -  
 Not even I - would undo me so!

40

*December 1912*

### 278 *Your Last Drive*

HERE by the moorway you returned,  
 And saw the borough lights ahead  
 That lit your face - all undiscerned  
 To be in a week the face of the dead,  
 And you told of the charm of that haloed view  
 That never again would beam on you.

5

And on your left you passed the spot  
 Where eight days later you were to lie,  
 And be spoken of as one who was not;  
 Beholding it with a heedless eye  
 As alien from you, though under its tree  
 You soon would halt everlastingly.

10

I drove not with you. . . . Yet had I sat  
 At your side that eve I should not have seen  
 That the countenance I was glancing at  
 Had a last-time look in the flickering sheen,  
 Nor have read the writing upon your face,  
 'I go hence soon to my resting-place;

15

'You may miss me then. But I shall not know  
 How many times you visit me there,  
 Or what your thoughts are, or if you go  
 There never at all. And I shall not care.  
 Should you censure me I shall take no heed,  
 And even your praises no more shall need.'

20

True: never you'll know. And you will not mind.  
 But shall I then slight you because of such?  
 Dear ghost, in the past did you ever find  
 The thought 'What profit,' move me much?  
 Yet abides the fact, indeed, the same, -  
 You are past love, praise, indifference, blame.

25

30

December 1912

279 *The Walk*

You did not walk with me  
 Of late to the hill-top tree  
     By the gated ways,  
     As in earlier days;  
     You were weak and lame, 5  
     So you never came,  
 And I went alone, and I did not mind,  
 Not thinking of you as left behind.

    I walked up there to-day  
     Just in the former way; 10  
         Surveyed around  
         The familiar ground  
         By myself again:  
         What difference, then?  
 Only that underlying sense 15  
 Of the look of a room on returning thence.

280 *Rain on a Grave*

CLOUDS spout upon her  
     Their waters amain  
     In ruthless disdain, –  
 Her who but lately  
     Had shivered with pain 5  
 As at touch of dishonour  
 If there had lit on her  
 So coldly, so straightly  
     Such arrows of rain:  
  
 One who to shelter 10  
     Her delicate head  
 Would quicken and quicken  
     Each tentative tread  
 If drops chanced to pelt her  
     That summertime spills 15  
     In dust-paven rills

When thunder-clouds thicken  
 And birds close their bills.  
 Would that I lay there  
 And she were housed here! 20  
 Or better, together  
 Were folded away there  
 Exposed to one weather  
 We both, – who would stray there  
 When sunny the day there, 25  
 Or evening was clear  
 At the prime of the year.  
 Soon will be growing  
 Green blades from her mound,  
 And daisies be showing 30  
 Like stars on the ground,  
 Till she form part of them –  
 Ay – the sweet heart of them,  
 Loved beyond measure  
 With a child's pleasure 35  
 All her life's round.

31 Jan. 1913

## 281 *I Found Her Out There*

I FOUND her out there  
 On a slope few see,  
 That falls westwardly  
 To the salt-edged air,  
 Where the ocean breaks 5  
 On the purple strand,  
 And the hurricane shakes  
 The solid land.  
 I brought her here,  
 And have laid her to rest 10  
 In a noiseless nest  
 No sea beats near.  
 She will never be stirred  
 In her loamy cell  
 By the waves long heard 15  
 And loved so well.

So she does not sleep  
 By those haunted heights  
 The Atlantic smites  
 And the blind gales sweep, 20  
 Whence she often would gaze  
 At Dundagel's famed head,  
 While the dipping blaze  
 Dyed her face fire-red;  
  
 And would sigh at the tale 25  
 Of sunk Lyonesse,  
 As a wind-tugged tress  
 Flapped her cheek like a flail;  
  
 Or listen at whiles 30  
 With a thought-bound brow  
 To the murmuring miles  
 She is far from now.  
  
 Yet her shade, maybe,  
 Will creep underground  
 Till it catch the sound 35  
 Of that western sea  
 As it swells and sobs  
 Where she once domiciled,  
 And joy in its throbs  
 With the heart of a child. 40

## 282 *Without Ceremony*

It was your way, my dear,  
 To vanish without a word  
 When callers, friends, or kin  
 Had left, and I hastened in  
 To rejoin you, as I inferred. 5  
  
 And when you'd a mind to career  
 Off anywhere – say to town –  
 You were all on a sudden gone  
 Before I had thought thereon,  
 Or noticed your trunks were down. 10

So, now that you disappear  
 For ever in that swift style,  
 Your meaning seems to me  
 Just as it used to be:  
 'Good-bye is not worth while!' 15

### 283 *Lament*

How she would have loved  
 A party to-day! –  
 Bright-hatted and gloved,  
 With table and tray  
 And chairs on the lawn 5  
 Her smiles would have shone  
 With welcomings. . . . But  
 She is shut, she is shut  
     From friendship's spell  
     In the jailing shell 10  
     Of her tiny cell.

Or she would have reigned  
 At a dinner to-night  
 With ardours unfeigned,  
 And a generous delight; 15  
 All in her abode  
 She'd have freely bestowed  
 On her guests. . . . But alas,  
 She is shut under grass  
     Where no cups flow, 20  
     Powerless to know  
     That it might be so.

And she would have sought  
 With a child's eager glance  
 The shy snowdrops brought 25  
 By the new year's advance,  
 And peered in the rime  
 Of Candlemas-time  
 For crocuses . . . chanced  
 It that she were not tranced 30  
     From sights she loved best;  
     Wholly possessed  
     By an infinite rest!

And we are here staying  
 Amid these stale things, 35  
 Who care not for gaying,  
 And those junketings  
 That used so to joy her,  
 And never to cloy her  
 As us they cloy! . . . But 40  
 She is shut, she is shut  
     From the cheer of them, dead  
     To all done and said  
     In her yew-arched bed.

### 284 *The Haunter*

HE does not think that I haunt here nightly:  
     How shall I let him know  
 That whither his fancy sets him wandering  
     I, too, alertly go? –  
 Hover and hover a few feet from him 5  
     Just as I used to do,  
 But cannot answer the words he lifts me –  
     Only listen thereto!

When I could answer he did not say them:  
     When I could let him know 10  
 How I would like to join in his journeys  
     Seldom he wished to go.  
 Now that he goes and wants me with him  
     More than he used to do,  
 Never he sees my faithful phantom 15  
     Though he speaks thereto.

Yes, I companion him to places  
     Only dreamers know,  
 Where the shy hares print long paces,  
     Where the night rooks go; 20

Into old aisles where the past is all to him,  
     Close as his shade can do,  
 Always lacking the power to call to him,  
     Near as I reach thereto!



What a good haunter I am, O tell him! 25  
     Quickly make him know  
 If he but sigh since my loss befell him  
     Straight to his side I go.  
 Tell him a faithful one is doing  
     All that love can do 30  
 Still that his path may be worth pursuing,  
     And to bring peace thereto.

### 285 *The Voice*

WOMAN much missed, how you call to me, call to me,  
 Saying that now you are not as you were  
 When you had changed from the one who was all to me,  
 But as at first, when our day was fair.

Can it be you that I hear? Let me view you, then, 5  
 Standing as when I drew near to the town  
 Where you would wait for me: yes, as I knew you then,  
 Even to the original air-blue gown!

Or is it only the breeze, in its listlessness  
 Travelling across the wet mead to me here, 10  
 You being ever dissolved to wan wistlessness,  
 Heard no more again far or near?

    Thus I; faltering forward,  
     Leaves around me falling,  
 Wind oozing thin through the thorn from norward, 15  
     And the woman calling.

*December 1912*

### 286 *His Visitor*

I COME across from Mellstock while the moon wastes weaker  
 To behold where I lived with you for twenty years and more:  
 I shall go in the gray, at the passing of the mail-train,  
 And need no setting open of the long familiar door  
     As before. 5

The change I notice in my once own quarters!

A formal-fashioned border where the daisies used to be,  
The rooms new painted, and the pictures altered,  
And other cups and saucers, and no cosy nook for tea  
As with me.

I discern the dim faces of the sleep-wrapt servants;  
They are not those who tended me through feeble hours and strong,  
But strangers quite, who never knew my rule here,  
Who never saw me painting, never heard my softling song  
Float along.

So I don't want to linger in this re-decked dwelling,  
I feel too uneasy at the contrasts I behold,  
And I make again for Mellstock to return here never,  
And rejoin the roomy silence, and the mute and manifold  
Souls of old.

1913

## 287 *A Circular*

As 'legal representative'  
I read a missive not my own,  
On new designs the senders give  
For clothes, in tints as shown.

Here figure blouses, gowns for tea,  
And presentation-trains of state,  
Charming ball-dresses, millinery,  
Warranted up to date.

And this gay-pictured, spring-time shout  
Of Fashion, hails what lady proud?  
Her who before last year ebb'd out  
Was costumed in a shroud.

288 *A Dream or No*

WHY go to Saint-Juliot? What's Juliot to me?  
Some strange necromancy  
But charmed me to fancy  
That much of my life claims the spot as its key.

Yes. I have had dreams of that place in the West, 5  
     And a maiden abiding  
     Thereat as in hiding;  
 Fair-eyed and white-shouldered, broad-browed and brown-tressed.  
  
 And of how, coastward bound on a night long ago,  
     There lonely I found her, 10  
     The sea-birds around her,  
 And other than nigh things uncaring to know.  
  
 So sweet her life there (in my thought has it seemed)  
     That quickly she drew me  
     To take her unto me, 15  
 And lodge her long years with me. Such have I dreamed.  
  
 But nought of that maid from Saint-Juliot I see;  
     Can she ever have been here,  
     And shed her life's sheen here,  
 The woman I thought a long housemate with me? 20  
  
 Does there even a place like Saint-Juliot exist?  
     Or a Vallency Valley  
     With stream and leafed alley,  
 Or Beeny, or Bos with its flounce flinging mist?  
*February 1913*

### 289 *After a Journey*

HERETO I come to view a voiceless ghost;  
     Whither, O whither will its whim now draw me?  
 Up the cliff, down, till I'm lonely, lost,  
     And the unseen waters' ejaculations awe me.  
 Where you will next be there's no knowing, 5  
     Facing round about me everywhere,  
     With your nut-coloured hair,  
 And gray eyes, and rose-flush coming and going.  
  
 Yes: I have re-entered your olden haunts at last;  
     Through the years, through the dead scenes I have tracked you; 10  
 What have you now found to say of our past –  
     Scanned across the dark space wherein I have lacked you?  
 Summer gave us sweets, but autumn wrought division?  
     Things were not lastly as firstly well  
     With us twain, you tell? 15

But all's closed now, despite Time's derision.

I see what you are doing: you are leading me on

To the spots we knew when we haunted here together,  
The waterfall, above which the mist-bow shone

At the then fair hour in the then fair weather, 20

And the cave just under, with a voice still so hollow

That it seems to call out to me from forty years ago,

When you were all aglow,

And not the thin ghost that I now frailly follow!

Ignorant of what there is flitting here to see, 25

The waked birds preen and the seals flop lazily;

Soon you will have, Dear, to vanish from me,

For the stars close their shutters and the dawn whitens hazily.

Trust me, I mind not, though Life lours,

The bringing me here; nay, bring me here again! 30

I am just the same as when

Our days were a joy, and our paths through flowers.

*Pentargan Bay*

## 290 *A Death-Day Recalled*

BEENY did not quiver,

Juliot grew not gray,

Thin Vallency's river

Held its wonted way.

Bos seemed not to utter 5

Dimmest note of dirge,

Targan mouth a mutter

To its creamy surge.

Yet though these, unheeding,

Listless, passed the hour

Of her spirit's speeding, 10

She had, in her flower,

Sought and loved the places –

Much and often pined

For their lonely faces 15

When in towns confined.

Why did not Vallency

In his purl deplore

One whose haunts were whence he

Drew his limpid store? 20

Why did Bos not thunder,  
 Targan apprehend  
 Body and Breath were sunder  
 Of their former friend?

## 291 *Beeny Cliff*

*March 1870–March 1913*

### I

O THE opal and the sapphire of that wandering western sea,  
 And the woman riding high above with bright hair flapping free –  
 The woman whom I loved so, and who loyally loved me.

### II

The pale mews plained below us, and the waves seemed far away  
 In a nether sky, engrossed in saying their ceaseless babbling say,  
 As we laughed light-heartedly aloft on that clear-sunned March day.

### III

A little cloud then cloaked us, and there flew an irised rain,  
 And the Atlantic dyed its levels with a dull misfeatured stain,  
 And then the sun burst out again, and purples prinked the main.

### IV

– Still in all its chasmal beauty bulks old Beeny to the sky, 10  
 And shall she and I not go there once again now March is nigh,  
 And the sweet things said in that March say anew there by and by?

### V

What if still in chasmal beauty looms that wild weird western shore,  
 The woman now is – elsewhere – whom the ambling pony bore,  
 And nor knows nor cares for Beeny, and will laugh there nevermore. 15

## 292 *At Castle Boterel*

As I drive to the junction of lane and highway,  
 And the drizzle bedrenches the waggonette,  
 I look behind at the fading byway,  
 And see on its slope, now glistening wet, 5  
 Distinctly yet  
 Myself and a girlish form benighted

In dry March weather. We climb the road  
Beside a chaise. We had just alighted  
To ease the sturdy pony's load  
When he sighed and slowed. 10

What we did as we climbed, and what we talked of  
Matters not much, nor to what it led, –  
Something that life will not be balked of  
Without rude reason till hope is dead,  
And feeling fled. 15

It filled but a minute. But was there ever  
A time of such quality, since or before,  
In that hill's story? To one mind never,  
Though it has been climbed, foot-swift, foot-sore,  
By thousands more. 20

Primaeval rocks form the road's steep border,  
And much have they faced there, first and last,  
Of the transitory in Earth's long order;  
But what they record in colour and cast  
Is – that we two passed. 25

And to me, though Time's unflinching rigour,  
In mindless rote, has ruled from sight  
The substance now, one phantom figure  
Remains on the slope, as when that night  
Saw us alight. 30

I look and see it there, shrinking, shrinking,  
I look back at it amid the rain  
For the very last time; for my sand is sinking,  
And I shall traverse old love's domain  
Never again. 35

*March 1913*

### 293 *Places*

NOBODY says: Ah, that is the place  
Where chanced, in the hollow of years ago,  
What none of the Three Towns cared to know –  
The birth of a little girl of grace –  
The sweetest the house saw, first or last; 5  
Yet it was so  
On that day long past.

Nobody thinks: There, there she lay  
 In a room by the Hoe, like the bud of a flower,  
 And listened, just after the bedtime hour,  
 To the stammering chimes that used to play 10

The quaint Old Hundred-and-Thirteenth tune  
 In Saint Andrew's tower  
 Night, morn, and noon.

Nobody calls to mind that here 15  
 Upon Boterel Hill, where the waggoners skid,  
 With cheeks whose airy flush outbid  
 Fresh fruit in bloom, and free of fear,  
 She cantered down, as if she must fall  
 (Though she never did), 20  
 To the charm of all.

Nay: one there is to whom these things,  
 That nobody else's mind calls back,  
 Have a savour that scenes in being lack,  
 And a presence more than the actual brings; 25  
 To whom to-day is beneaped and stale,  
 And its urgent clack  
 But a vapid tale.

*Plymouth, March 1913*

## 294 *The Phantom Horsewoman*

### I

QUEER are the ways of a man I know:  
 He comes and stands  
 In a careworn craze,  
 And looks at the sands  
 And the seaward haze 5  
 With moveless hands  
 And face and gaze,  
 Then turns to go . . .  
 And what does he see when he gazes so?

## II

They say he sees as an instant thing 10  
 More clear than to-day,  
 A sweet soft scene  
 That was once in play  
 By that briny green;  
 Yes, notes alway 15  
 Warm, real, and keen,  
 What his back years bring –  
 A phantom of his own figuring.

## III

Of this vision of his they might say more:  
 Not only there 20  
 Does he see this sight,  
 But everywhere  
 In his brain – day, night,  
 As if on the air  
 It were drawn rose bright – 25  
 Yea, far from that shore  
 Does he carry this vision of heretofore:

## IV

A ghost-girl-rider. And though, toil-tried,  
 He withers daily,  
 Time touches her not, 30  
 But she still rides gaily  
 In his rapt thought  
 On that shagged and shaly  
 Atlantic spot,  
 And as when first eyed 35  
 Draws rein and sings to the swing of the tide.

1913

295 *The Spell of the Rose*

'I MEAN to build a hall anon,  
 And shape two turrets there,  
 And a broad newelled stair,  
 And a cool well for crystal water;



Yes; I will build a hall anon,  
 Plant roses love shall feed upon,  
 And apple-trees and pear.' 5

He set to build the manor-hall,  
 And shaped the turrets there,  
 And the broad newelled stair, 10  
 And the cool well for crystal water;  
 He built for me that manor-hall,  
 And planted many trees withal,  
 But no rose anywhere.

And as he planted never a rose 15  
 That bears the flower of love,  
 Though other flowers throve  
 Some heart-bane moved our souls to sever  
 Since he had planted never a rose;  
 And misconceits raised horrid shows, 20  
 And agonies came thereof.

'I'll mend these miseries,' then said I,  
 And so, at dead of night,  
 I went and, screened from sight,  
 That nought should keep our souls in severance, 25  
 I set a rose-bush. 'This,' said I,  
 'May end divisions dire and wry,  
 And long-drawn days of blight.'

But I was called from earth - yea, called  
 Before my rose-bush grew; 30  
 And would that now I knew

What feels he of the tree I planted,  
 And whether, after I was called  
 To be a ghost, he, as of old,  
 Gave me his heart anew! 35

Perhaps now blooms that queen of trees  
 I set but saw not grow,  
 And he, beside its glow -  
 Eyes couched of the mis-vision that blurred me -  
 Ay, there beside that queen of trees 40  
 He sees me as I was, though sees  
 Too late to tell me so!

## 296 *St Launce's Revisited*

SLIP back, Time!  
Yet again I am nearing  
Castle and keep, uprearing  
Gray, as in my prime.

At the inn  
Smiling nigh, why is it  
Not as on my visit  
When hope and I were twin?

Groom and jade  
Whom I found here, moulder;  
Strange the tavern-holder,  
Strange the tap-maid.

Here I hired  
Horse and man for bearing  
Me on my wayfaring  
To the door desired.

Evening gloomed  
As I journeyed forward  
To the faces shoreward,  
Till their dwelling loomed.

If again  
Towards the Atlantic sea there  
I should speed, they'd be there  
Surely now as then? . . .

Why waste thought,  
When I know them vanished  
Under earth; yea, banished  
Ever into nought!

5

10

15

20

25

## 297 *Where the Picnic Was*

WHERE we made the fire  
In the summer time  
Of branch and briar  
On the hill to the sea,  
I slowly climb

5

Through winter mire,  
 And scan and trace  
 The forsaken place  
 Quite readily.

Now a cold wind blows, 10  
 And the grass is gray,  
 But the spot still shows  
 As a burnt circle – aye,  
 And stick-ends, charred,  
 Still strew the sward 15  
 Whereon I stand,  
 Last relic of the band  
 Who came that day!

Yes, I am here  
 Just as last year, 20  
 And the sea breathes brine  
 From its strange straight line  
 Up hither, the same  
 As when we four came.

– But two have wandered far 25  
 From this grassy rise  
 Into urban roar  
 Where no picnics are,  
 And one – has shut her eyes  
 For evermore 30

*POEMS OF 1912-13 — Veteris vestigia flammae —*

「1912年—13年の詩」は、ハーディが第一夫人のエマ (Emma) をなくした直後の妻恋の歌である。ハーディの詩約950篇中で、最高の詩群とみなされるばかりでなく、英詩全体でも、殊に老年の恋の歌としては、出色のものとする評価はほぼ定まったと思われる。以下の註解は、各詩の背景と語義を解説することにより、この詩群の理解の一助になるよう願ったものである。

訳は、それだけで詩として朗読できるものを心がけた。木下順二氏のいう、「新しい古文体」も試みてみた。原音を訳に出すことはできないけれど、行割りは原詩に従った。出来ばえは、みなさんの御判断に仰ぐ。最初、既出の訳を見ずに自己流の訳を書き出して、その後で、諸家の訳に目を通した。その結果、見解の別れる個所が思いのほか多数に渡った。そこで、先達と違う主な個所を列挙して、一種の集中版にした。私の手に入った訳、注釈本は以下のものである。滝山季乃氏が「一番お世話になった」といわれる松本秀彦氏の訳は手に入らなかった。引用するときは、訳注者の苗字をカッコに入れて示した。出版年順に掲げる。

吉原重雄訳『ハーディ詩集』東京：素人社、1930.

橋本修『トマス・ハーディ研究』東京：千城書店、1958.

山本文之助訳『トマス・ハーディの詩』東京：千城出版、1967.

藤井繁訳『ハーディ：愛と人生の詩』東京：千城出版、1969.

大平弥生注釈『ハーディ詩選』東京：研究社、1977.

D・ホーキングズ『小説家・詩人ハーディ評伝』訳、前川哲郎・福岡忠雄・古我正和。東京：千城、1981.

古川隆夫訳『トマス・ハーディ詩集』東京：相原書店、1981.

秋山徹夫訳『ハーディ詩集』東京：八潮出版、1981.

古川隆夫訳『トマス・ハーディ詩集』(続) 東京：桐原書店、1985.

前川俊一訳『ハーディ詩選・愛と人生』東京：英宝社、1986.

滝山季乃、橘智子訳『トマス・ハーディ第四詩集：境過の風刺』東京：千城、1989.

- 吉川道夫『言語的テクスチャーから見たトマス・ハーディの詩』東京：篠崎書林、1991。  
 中村志郎『ハーディの詩と詩劇の世界』東京：英潮社、1991。  
 深澤俊編『ハーディ小事典』東京：研究社、1993。

英米の注釈書、研究書で、参考にした主なものを下に記す。

- Blunden, Edmund, *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1954.  
 Purdy, Richard Little. *Thomas Hardy : A Bibliographical Study*. London : Oxford U.P., 1954.  
 Wain, John, ed. *Selected Shorter Poems of Thomas Hardy*. London : Macmillan, 1966.  
 Marsden, Kenneth. *The Poems of Thomas Hardy : A Critical Introduction*. London : the Athlone Press, 1969.  
 Bailey, J. O. *The Poetry of Thomas Hardy*. Chapel Hill : North Carolina U.P., 1970.  
 Davie, Donald. *Thomas Hardy and British Poetry*. New York : Oxford U. P., 1972.  
 Gibson, James, ed. *Chosen Poems of Thomas Hardy*. London : Macmillan, 1975.  
 Paulin, Tom. *Thomas Hardy : The Poetry of Perception*. London : Macmillan, 1975.  
 Phelps, Kenneth. *The Wormwood Cup : Thomas Hardy in Cornwall*. Cornwall : Kenneth Phelps, 1975.  
 Orel, Harold. *The Final Years of Thomas Hardy 1912-1928*. London: Macmillan, 1976.  
 Pinion, F. B. *A Commentary on the Poems of Thomas Hardy*. London : Macmillan, 1976.  
 Gittings, Robert. *The Older Hardy*. London : Heinemann, 1978.  
 Hardy, Emma. *Some Recollections*. Oxford : Oxford U. P., 1979.  
 Gibson and Johnson, ed. *Thomas Hardy : Poems*. London : Macmillan, 1979.  
 Gittings and Manton. *The Second Mrs Hardy*. Oxford : Oxford U. P.,

1981.

Das, Manas. *Thomas Hardy : Poet of Tragic Vision*. London : Macmillan, 1983.

Johnson, Trevor. *A Critical Introduction to the Poems of Thomas Hardy*. London : Macmillan, 1991.

Willmott, Richard. *Thomas Hardy : Selected Poems*. Oxford : Oxford U. P., 1992.

使用したテキストは、James Gibson, ed., *The Complete Poems of Thomas Hardy* (Macmillan, 1976) である。行数は便宜上、訳注者がつけた。

### *Veteris vestigia flammae*

ハーディは、小説にはエピグラフないし副題を付すことが普通であったが、詩に題辞をつけることは少ない。このエピグラフは、Virgil の *Aeneid* 第4巻23行の引用である。Dido の Aeneas に対する恋と死を扱った、白眉のこの巻で、殺された最初の夫 Sychaeus に、二夫にまみえずと誓っていた Dido が、Aeneas に抗いがたく抱いた恋を、妹の Anna に打ちあける言葉の一節である。大平及び吉川は、‘Relics of the old fire’ と注している。これは、Bailey を借用したものだろう (p.293)。Pinion は、‘the traces of old love’ と訳している (p. 102)。Willmott も、“‘traces of an old flame’ (ie. of his earlier love for Emma)” と注釈している (p. 79)。Willmott が最も真意に近いように思える。‘Relics’ では、過去に重点がおかれすぎる。

なぜなら、この句を含む原文は、‘agnosco veteris vestigia flammae’ だからだ。この訳は様々である。ドーセット州博物館に、ハーディが所有していた John Dryden 訳 *The Works of Virgil* (London, T. Allman and Son) が所蔵されている。T, H, d などの特徴からみて、多分20歳以前のハーディの筆蹟で、‘Thomas Hardy/The gift of his Mother.’ とフライリーフに記入されている。それによると、上記の文は、‘Somewhat I find within, if not the same,/Too like the sparkles of my former flame.’ と記されている。ペンギン版の *Virgil, The Aeneid* では、J. Knight は、‘I can discern the old fire coming near again.’ と散文訳をつけている。

となれば、このエピグラフは、単に過去の ‘relics’ ではなく、Dido が新たに

感じた恋と重ね合せられた、甦った恋の ‘traces’ ととるのが自然だろう。‘vestigium’ は、‘vestigo’ (to follow in a track) から派生しており、‘footprint’ と ‘vestige’ の二義をもつ。この詩群にハーディがこれをエピグラフとしたのは、昔の恋の痕跡を再体験して跡づける詩たち、という意味合いに於てであろう。

## The Going

この詩は、第一夫人 Emma Hardy の急逝を題材にしたものである。彼女が息をひきとった、1912年11月27日は、Florence Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (以後 *Life*) に次のように記入されている。

The next morning the maid told him in answer to his inquiry that when she had as usual entered Mrs. Hardy's room a little earlier she had said she was better, and would probably get up later on ; but that she now seemed worse. Hastening to her he was shocked to find her much worse, lying with her eyes closed and unconscious. The doctor came quickly, but before he arrived her breathing softened and ceased.

(pp. 359-360.)

ハーディ自身が大部分書いたこの *Life* で、1912年の最後に、‘She (= Emma) had not mentioned to her husband, or to anybody else so far as he could discover, that she had any anticipations of death before it occurred so suddenly.’ (p. 360) と記されている。

これに対し、Robert Gittings は、*The Older Hardy* で、‘To everyone, he (= Hardy) pretended that her death was sudden and unexpected. He softened every aspect of it in the autobiography he wrote a few years later, and excused himself.’ (p.p. 149-50) と指摘している。Gittings の浩瀚なハーディ伝2巻は、彼が思うこの事実が原動力となって完成された感がある。1980年にロンドンで会った際に、あなたのハーディ伝はどうしてハーディに批判的に、ときにはハーディを偽善者のように書いているのですか、と質問すると、ギッティンズが答えた言葉は、「Keats は彼の言葉の通りの人物であったのに対し、ハーディは表の言動とあまりに違う人物だからだ」というのであった。この言葉を伝えたときの憤慨された大沢衛先生の様子を思い

出す。Gittings は、亡きエマを恋うる歌を、ハーディの罪意識から生じたものとするのだが、そういう面はあっても、Gittings の理由づけと根拠をそのまま認める人は少ないだろう。

# 5. your term here

‘term’ は法律用語の「賃貸借期間」の意だろう。「ここでの生活」(藤井)、「この世のことば」(古川)はどうだろうか。

# 10. utter a wish for a word

「ひとことのねがいも語らないのに」(藤井)、「ひとことも望みをもらさず」(古川)、「ひとこと話したいという願い」(大平)、「ひと言の願いも洩らさなかったとは」(秋山)、「一言話しかけたいそぶりも見せず」(前川)、「一言言葉をかけてほしいとも言わないで」(滝山・橘)、「一言の願いも洩らすことなく」(吉川)などの訳がある。

‘a wish for a word’ は、3通りの解釈を許すだろう。1. 「ひとこと言ってほしいという願い」、2. 「ひとこと言いたいという願い」、3. 「ひとこと話し合いたいという願い」。断定できないが、私は、1、3、2の順で、プライオリティがつくように思う。‘for’ は、2の意では少し強すぎるのではない。従って、(藤井)、(古川)、(秋山)、(吉川)はどうだろうか。上の諸例では、(滝山・橘)が最良と思うが、拙訳ではアンヴィグニティを生かした。

# 20-21 The yawning blankness/Of the perspective sickens me !

この一文の先達の訳は一見多様だが、似たりよったりに見える。「遠景の大きなうつろさ」(藤井)、「ポカンとあいた あっけらかんの 遠景」(古川)、「あたりの眺めがあくびしている うつろなさま」(秋山)、「ポツカリとあいた見通しの空しさ」(前川)、「大きく口を開いた遠景のうつろさ」(滝山・橘)、「退屈で虚ろな遠景」(吉川)。

どの訳も、今一つぴたりしていない。‘perspective’ を「遠景」としているが、素直に「遠近画的風景」ととるべきではないか。Wessex Poems に収められた、‘Her Death and After’ にハーディが付した、冬枯れの並木道の遠近画がこの句のイメージに近いものであろう。12月の並木道の遠近図の消点にあたるところが、‘yawning’ していて、即ち「口をあけていて」、そこが、いるべき人がいない‘blankness’ であるというのであり、それが私を‘sickens’するのである。それを「わたしをあき





あきさせる」(藤井)とか、「私の胸を悪くさせてしまう！」(吉川)と訳すのでは、「私」の哀傷が伝わらないのではないか。

38-39 I seem but a dead man held on end/To sink down soon

これまでの邦訳で、この部分の正訳は見当らない。「そうそう すべては当然／そのまま去ったのだ いや去らねば／わしもやがては埋めるべき立てるひと」と、藤井繁氏はこの連を訳しておられるが、意味をなさない。「ささえでもらって立っている死人」(大平)、「わたしとて いまやつづいて後を追う生ける屍」(古川)、「ぼくは倒れかかるのを支えられ立っている死人にすぎない気がする」(秋山)、「僕は支えられて立つ死人のようなもの」(前川)、「今の私は立っている屍に似て倒れる日も間近い」(滝山・橘)、「私はやがて沈み行くのを支えられて立つ 生きる屍に過ぎないように思う」(吉川)。

どの訳も、具体的なイメージに基いていないように思う。一つには、‘on end’を‘held’と切り離して、「直立して」の意にとったからかもしれない。‘held on end’は、「端をもつ」ではないだろうか。私には、これは水葬のイメージに思われる。船上より海中に投下される前に端を持って支えられている死者が、‘a dead man held on end’で、「やがて海底に沈む」運命にあると考えるのは間違っているだろうか。

この一節の解釈で最近知った、もっとも啓示的な説明は、Trevor Johnsonのものである。‘There follows the appalling image of himself as an inverted corpse, *held on end* like a marionette perhaps or possibly the Hanged Man (who is depicted in the Tarot Pack as suspended by his ankle)’ (p. 221)

Alfred Douglas, *The Tarot* (Middlesex: Penguin, 1972) の ‘The Hanged Man’ の項目には、示唆にみちた記述がみられる。ただ、この考えでは、‘To sink down soon’ がどうつながるのであろうか。

私の考えでも、不明の点が残る。Melville の *Billy Budd* の27章にある水葬の描写には、砲弾の重りをつけたハンモックに屍体をつつみ、海に投下されるシーンがある。その折に、死体のどの部分をもって投げられるのか不明である。Sir Brangwyn の絵 ‘The Burial at Sea’ では、顔の部分は船側に、足の部分は海側にあって、屍体をのせた板を数人の男が支えている。この後どのような作業があるのか私は



知らない。従って、‘held on end’の「端」が、足を意味して、さかさに海中に投下するという考えに確信はもてないので、訳の方は足の部分をもつのか、頭の部分をもつのか特定しなかった。

## Your Last Drive

このドライブが行なわれたのは、1912年11月22日のことである。*Life* に次のように記されている。

She went out up to the 22nd November, when, though it was a damp, dark afternoon, she motored to pay a visit six miles off. The next day she was distinctly unwell, and the day after that was her birthday, when she seemed depressed. (p. 360)

この詩にあるように、5日後に Emma は息をひきとり、8日後に Stinsford Church に埋葬された。*Life* によると、何年も前、エマは生れ育った Plymouth の一門の納骨所に納められることを望んでいたが、教会の都合でそこが一部分こわされ、両親の許に安置してほしいという願いは不可能になった旨を、夫のハーディに語った。

コーンウォールの St. Juliot Church の墓地が第二の候補地であったが、諸般の事情でそこも見送られた。*Life* に次の記述がある。

Hardy did not favour the thought of her being carried to that lonely coast unless he could be carried thither likewise in due time ; and on this point all was uncertain. The funeral was accordingly at Stinsford, a mile from Dorchester and Max Gate, where the Hardys had buried for many years. (p. 360)

### 1. the moorway

この日、Emma はロンドン・ロード (A35) を通って、Puddletown まで——6マイルとあるので、もう少し先までかもしれない——自動車に出かけた。この詩はその帰途を扱ったものであり、この‘the moorway’は現在の A35 を指す。

### 2. the borough lights ahead

‘the borough’ は Dorchester のことである。ロンドン側から A35 即ちロンドン・ロードを通過して、ドーチェスターの手前に来ると、道は一度下り、前方の丘の上に街がみえる。夕暮どきならば、5 行にあるように、街全体が「後光さす眺め」になる。殊に、初冬の光景ならば、その表現はよく合う。

### 3. all undiscerned

「すべては一週間にして死の顔となることも知らず」(藤井)、「まったく誰にもわからなかった」(古川)、「誰も見分ける人はいなかった」(滝山・橘)。

これらの訳は、‘all’ を代名詞ととっているが、この ‘all’ は副詞であり、undiscerned は過去分詞だろう。前川俊一氏の「全く気付かないで」が正しい。

### 13. I drove not with you

「わしはおまえといっしょではなかった」(藤井)、「ぼくはきみとは行かなかった」(古川)、「僕は君に同乗しなかった」(前川)、「私はあなたと一緒に出かけなかった」(滝山・橘)。

どの訳も、‘your last drive’ に同道しなかったという意にとれる。しかし、この過去時制は、上二連の過去時制と違って、過去の習慣となった事実を指しているのではないだろうか。私の訳でも、そのことがうまく表現されているかどうか自信はないが、Hardy が、Emma は恐らく車で外出することがしばしばであったろうが、もう Emma と一緒にドライブする習慣は途絶えていた、という意である。

### 27—30.

「幽霊よ 過去にあなたは『何のために』／という考えで感動させたでしょう／だが まったくそのままに事実は残るのです／かつての愛しい 称讃の とるに足りぬ非難のひと」(藤井)。

この訳は、‘move’、‘past’ をとり違えている。他の諸家の訳を参考にすべきである。

## The Walk

### 2. the hill-top tree

Bailey は、Max Gate 南西 3 マイルにある ‘Culliford Tree’ と推定している。これに対し、Pinion は、‘Not Culliford Tree. Probably on Conygar Hill, to which “the gated ways” led on the cross-country walk south from Max Gate to Winterborne Came and beyond.’ (p. 303) と注をつけている。

これは Pinion の方が正しいと思われる。‘Culliford Tree’ は、Pinion の指

摘によれば、‘a large county area’ の名前あるいは ‘a tumulus’ の名前 (p. 259) であるが、たとえそうでなくても、73歳のハーディが散歩したり、生前のエマを誘うには遠すぎる。ハーディがいつも散歩していた、Max Gate 前の Conygar Hill の方が自然である。

私は、1979年、今の Max Gate にお住いの Jesty 夫妻と同じコースを散歩したことがある。夫人が私と連れ立って登り、御主人は丘の向う側即ち海側で車で先行して待って下さっていた。確かに、‘the gated ways’ であった。Culliford Tree よりはずっと近い所であったが、老齢になってもそこを散歩したというハーディに、田舎の人を見た感じであった。「君は弱って足がまなならず だから決して来なかったんだ」という、ハーディの弁解は、事実その通りかもしれないと思ったものである。

#### 10. Just in the former way

「昔のままの道をたどり」(山本)、「昔のままの小道をたどり」(藤井)、「昔の道を通して」(滝山・橘) の諸訳は前置詞が in では無理だろう。1930年の吉原訳がむしろ正しい——「その昔、往きしがごとく」(吉原)。語意としては、古川氏訳「前とまったく同じように」が正確なところである。

#### 15—16. Only that understanding sense/Of the look of a room on returning thence.

私には難しい一節である。「帰りに部屋を見たときの」(山本)、「帰りに部屋をのぞいたときの」(藤井) という訳は違うように思う。‘the look’ は、「見えたとき」「のぞいたとき」のような意味ではなくて、「様子」とか「表情」であろう。‘a room’ とは、エマが死んだ部屋ではなかろうか。その部屋は、Mrs Jesty の話では、三階の屋根裏部屋であり、部屋の片隅に小さな暖炉のある、実に小さな部屋である。もし私見が正しければ、「帰りに」のぞけるような部屋ではない。ただ、確信をもって言えることは、「ある部屋の表情」とは、Emma の不在、非存在を示す部屋の様子であろうということである。

「‘Only that underlying sense’ と心には平静がよみがえり、静かな回想でもある」という、藤井繁氏の解説は、私には理解できない。

### Rain on a Grave

Purdy によると、Ms では、‘Rain on Her Grave’ とあった (p. 166)。‘Her’ を ‘a’ に変えることによって、普遍化すると共に、詩想も深まるのではないだろうか。前詩 ‘The walk’ の最終行の ‘a room’ も、同じ趣旨のものにとりた

い。

12-13. Would quicken and quicken/Each tentative tread

「あいつの感じやすい心を／守ろうと人は／仮りの歩みを速める」(藤井)、  
「足も地につかぬほどいそいそ歩みを早めたろうに」(古川)、「一時的に足を  
早めたことだろう／しだいしだいに」(滝山・橘)、「一步一步ためらいながら  
も／歩を早めたであろう」(吉川)、「足元悪い一步一步をいつも早め」(中村)。

どの訳も、‘tentative’に苦勞されているが、吉川訳が正しいと思われる。

Conradの*Heart of Darkness*に‘... some man...made a tentative jab with a spear at the white man...’という文があるが、これを柴田徹士氏は、「黒人は白人を神と思っているので、まさかと思いながらためしに刺してみたら槍が入ってしまった」というような説明をされた記憶がある。この詩の‘tentative’も、恐る恐る試しに足を出しながら、雨が強まってきて、そういう配慮をすっかり忘れて歩を早める様——終には淑女のたしなみもすてて走る様まで彷彿とさせる表現ではないだろうか。藤井訳は主語が違うし、後にくる「小鳥が岬をさして急ぐとき」も含めて再考が必要だろう。Cf. ‘She watched him enter, head erect, his feet tentative.’ D. H. Lawrence, ‘The Blind Man’.

19-27.

第3連はアンビギュアスである。‘here’や、たて続けに出てくる‘there’は一体何処なのだろう。また、l. 24の‘would’はどういう意味なのだろう。藤井訳は問題外としても、大方の訳はたとえば、吉川道夫氏の訳と軌を一にする。

私がそこに横たわり、彼女がここで雨宿りをしていれば！ それとも私たち一緒にくるまれて同じ風雨に、曝されていた方がましだろう——私たち二人は春の頃 太陽の照る日や 澄み切った夕方に そのあたりを散策したものだった

19行目の‘there’がStinsford教会の墓地であることには異論はあるまい。それならば、「ここで雨宿りしていれば」という「ここ」(here)は墓地の見える、例えば教会の建物としか考えられない。中村志郎氏の「妻はここで雨宿りさせてやりたい」も、古川氏の「彼女が雨宿りしていたならば」も、‘here’について吉川訳と同じ立場をとっていると思われる。古川氏は、「新しい墓石にふる雨」をながめながら」とコメントされているので、間違いなかろう。

しかし、‘here’はほんとうに新しい墓を眺めうる、雨宿りのできる、たとえば、教会の建物だったのだろうか。そもそも、‘housed’は、「雨宿り」と訳せる言葉なのか？

第1連第1行で、‘Clouds spout’と、進行形ではなく、現在形の動詞が使われている所をみると、どうも詩人は目の前で墓に降りつつける雨を言っているのではないように思える。即ち、‘here’は、ハーディが今雨をみている所、たとえば、Max Gate でもいいのではないか。

22行の‘there’も、Stinsfordの墓地を指すことに異論はなかろう。‘away’がついているので、一層、離れたところから、「そこ」を見ているように思える。

問題は24行の‘there’である。この解釈は、同じ文の‘would’のとり方に左右される。「そこいらを どんなにぼくらは 歩いたことか」(古川)、「向こうで当てなく歩いたもの」(中村)、それに吉川訳はいずれも、‘would’を過去の習慣を表すものとしてとっている。これに対し、滝山・橘氏は、「そこを連れ立ってさまようことだろう」と訳されている。即ち、仮定法にとられている。

Trevor Johnson は、この個所に言及して、次のように記している：

... Hardy, recalling how he and Emma would walk in the churchyard when ‘evening was clear/At the prime of the year’ feels he would be content to be ‘folded away...together’ with Emma, an admission of weariness as well as grief. p. 222.

こう見てくると、‘would’を過去の習慣にとるのが定説のように思える。私も、

「ふたりで逍遙したものであった」

「ふたりで散歩もしましょうに」

のどちらにするか迷ったが、後者をとることにした。意味の流れから、後者を当初から考えたが、26行の‘was’が、仮定法の文になじまないのではないかと、前者に傾いた——Johnsonの文をよむと殊にそう思った——が、身近にいるケンブリッジ出の英国人が‘would’を仮定法にとっても、‘was’と抵触しないと言ってくれたからである。

吉川道夫氏がこの詩の解説で、「EmmaはHardy家の人たちと付き合うのを嫌いこの教会にめったに行かなかった」と述べておられるように、Hardy夫妻がStinsford教会境内をよく散策したものだということに疑問をもつこ

とが一つであるが、それよりも、「よく散歩した」からそこに共に葬むらいたい、というのでは詩が浅くなると思う。従って、24行の‘there’は、19、22行の‘there’から一步踏み込んだ、「あの世」と考えたい。そしてそう考えると、‘here’は同時に「この世」をも指すことになる。

28-36.

Emma Hardy, *Some Recollections* の一頁目にある、‘I can quite remember when I was three years old being taken a little way into the country to see daisies, as children are taken to see the sea ; my surprise and joy were very great when I saw a whole field of them.’ から直接とられたと言われる。Bailey のあげる証拠によれば、Emma の daisies への思い出は生涯変らなかった。

### I Found Her Out There

Purdy によると、1912年11月に作詩されたもので、Hardy が妻の死後 Cornwall を訪ねる 3 ヶ月前の、1870年代のその地の思い出が題材である。

#### 18. those haunted heights

「あの丘」(藤井)、「あのなつかしい高原」(古川)、「彼女の馴染みの地」(前川)、「あの物の気じみた高台」(滝山・橘)。

‘haunted’ は、アーサー王伝説等の様々の霊がさまようという意であろう。滝山・橘訳はそういうことを考慮した訳なのだろうか。

#### 23. Dundagel's famed head

アーサー王の城と呼ばれる遺跡のある、Tintagel Head という岬のこと。

#### 26. sunk Lyonesse

伝説によると、アーサー王の地とされる Lyonesse は、コーンウォール南岸の海底に沈んだとされる。

29-32.

「それとも 折々に／ひとみをこらして／今は遠いあのひとの／はるかなささやきを聞くのか」(藤井)、「あるいは想いにうちしずみ／いまは遠い はるかかなたの／かすかな波のささやきを／彼女はじっと耳にしていよう」(古川)。

藤井訳は「はるかなささやき」を「あのひとの」ものとしているが、これは話にならない。両訳とも、‘listen’ を過去の習慣を表わす ‘would’ にかけていない。

滝山・橘訳「今は遙か数マイルも先の／波のささやきに／聞き耳を立てたりしたものだ」は、‘would listen’は正しく把握しているが、‘She is far from now’を理解していない。

前川俊一訳「(今では遠くなってしまったが)／延々とつらなる岸辺の呟きに／耳かたむけたものだった」が、最も正訳に近いだろう。

ただ、‘the murmuring miles’の前川訳は違っているように思う。コーンウォルの岩壁の連なる浜は、‘roaring’はしても、‘murmuring’はしない。これは、Emmaが住んでいた牧師館から浜までの距離が‘miles’であって、その距離が怒涛の音も、遠い潮騒にしまい、その呟きに Emmaが聞き耳をたてたものだということであろう。

## Lament

*Life* の1912年7月のところに次の記述がある。

Meanwhile in July he had returned to Max Gate just in time to be at a garden-party on July 16—the last his wife ever gave—which it would have much grieved him afterwards to have missed. The afternoon was sunny and the guests numerous on this final one of many occasions of such a gathering on the lawn there, and nobody foresaw the shadow that was so soon to fall on the house, Mrs. Hardy being then, apparently, in her customary health and vigour.

(p. 359)

この詩は、具体的には、この日の園遊会を想起して作られたものかもしれない。Emmaは、第4連の‘we’に恐らく含まれている第2夫人の Florence と違って、社交好きの人だったと記録に残っている。

1-2, 12—13.

「あいつはどんなに好きだったことか／きょうのこのパーティが」, 「こよいの晩さんの席を／あいつはよく支配したもの」——藤井繁訳

「彼女は今日のパーティを／どんなに楽しんだことだろう！」——古我正和訳

「彼女がいれば どんなに喜んだことだろう／今日の日のこのパーティを！」, 「あるいは今宵の晩餐を／彼女は…取り仕切ったことだろう」——古



川隆夫訳

「彼女はどんなに喜んだことだろうに／今日の園遊会を！」、「あるいは今宵の晩餐会に／…君臨したろうに」——滝山・橘訳。

藤井訳は‘would’をとり違えていて、他の二つの訳はその点は正しい。ただ共通して、「園遊会」、「晩餐会」が現実には催されたような訳は如何なものだろう。仮定法で書かれていること、‘party’, ‘dinner’ に不定冠詞‘a’が付されていることから、‘party’も‘dinner’も実際には行なわれていない仮想のものであることがわかる。その上、‘snowdrops’や‘Candlemas-time’から察して、Emmaが亡くなってから2、3ヶ月の頃と思われる時に、昼と夜続けての社交会は考えられない。

#### 26. By the new year's advance

「新年が近づくと」（古川）、「新年が近付くと」（滝山・橘）の二訳よりは、藤井訳の「新しい年の始めに」方があっているようだ。‘snowdrops’は正月に連関されるのではなく、年のサイクルの始めと結びつけられるもので、この‘the new year’は、そういう意味の「新しい年」と思う。

#### 43. To all done and said

「かつてしたことや話したこと」（藤井）、「かつての言動」（古川）の二訳はミスだろう。滝山・橘訳の「何かなされ 何が語られても」が無論正しい。

## The Haunter

ハーディの評伝は、この詩で Emma の亡霊が嘆いているように、晩年は彼女なしに旅行することが多かったことを伝えている。‘The Haunter’は、既出の邦訳は「亡霊」と訳している。適合する日本語がないので、「憑霊」という言葉を考えてみた。

#### 22. Close as his shade can do

「かれの霊が忍びよる後を追い」（古川）は‘shade’のとり違いだろう。滝山・橘訳の「あのひとの影法師ほどぴたりと」がすぐれている。

#### 27. If he but sigh since my loss befell him

「わたしの急逝以来 彼はため息ばかりだけど」（古川）、「わたしがいなくなって溜息ばかりつくのなら」（滝山・橘）の両訳は、‘if but’の強調性を軽視している。「～しさえすれば」直ちに行くという、Emmaの霊の迫力がこめられているのではないか。

## The Voice

Willmott は、「この詩は声に出して読み、その力強い音の効果を味わうことが必要である」(p. 79) と述べている。そして、‘call to me’ と ‘all to me’ のような、強調のシラブルのあとに続く 2 つの弱いシラブルは、消えゆく声を表わしているのではないかと言ひ、詩の最後でライムが突然変るのは、当惑した語り手が不快な現実に戻るからだという (p. 117)。正直なところ、日本人でそういう音までをほんとうに味わえる人はいないであろう。音の効果を日本語訳に移す努力はしたが、その結果は疑わしい。

### 4. when our day was fair

「わたしたちの毎日」(藤井)、「当初のわたし」(古川)、「ふたりの日々」(秋山)、「僕たちが楽しい日々」(前川)、「私たちの毎日」(滝山・橘)、「私たちの日々」(吉川)、「私たちの毎日」(中村)。

どの訳も、‘our day’ を「毎日」や「日々」のように、複数にしている。しかし、素直に単数にとって、ある晴れた特定の日にとるべきではなかろうか。‘at first’ も素直にとりたい。即ち、永遠の一瞬のような、ある一日、それもある一瞬と考えるべきではないか。

### 6. the town

Bailey は、‘Boscastle, near St. Juliot?’ と推測している。Pinion はそれを意識して、‘Launceston’ と断定している。Phelps は Bude から Boscastle へ行く街道の、St. Juliot へ通じる小道と交じわる所と推定している。日本の学者——吉川、前川、滝山・橘氏ら——は、Pinion の意見に従っている。私見では、どことも特定できないが、Launceston ではないように思う。同じ年の三月に Hardy は Launceston から馬車を雇って、St. Juliot へ行った。Some *Recollections* には、いとこたちに会いに Launceston に ‘basket carriage’ を駆っていったと書かれているが (p. 35)、そこまで Emma が若い男性を迎えに行くには遠すぎるし、そういう事実があれば、誰も言及しないのは不自然である。

### 7. Where you would wait for me

「よく待っていてくれた」(古川)、「いつも待っていた」(秋山)、「いつも私を待っていた」(滝山・橘)、「君がいつも待っていた」(中村) の諸訳のように、‘would’ を過去の習慣ととるのは、前注の理由を別にしても、無理だろう。Hardy は習慣になるほど頻繁に Cornwall を訪問していない。

### 8. Even to the original air-blue gown!

「あのさわやかな スカイブルー」(古川)、「あの斬新なスカイブルー」(吉川)、「個性あふれる空色」(中村)のように‘original’をとるのは違っているだろう。前川訳の「そのときまもっていた」が正解であろう。もっといえば、「幻」と対比して、その「幻」の元である、という意味が入っていると思う。

# 11. dissolved to wan wistlessness

‘wistlessness’: ‘state of not knowing, or not being known.’ (Willmott)

Hardy の造語で、どの訳者も苦労されている。吉川訳の「そしてお前は溶けて青色い無存在に化し」が、もとの原稿にあった ‘consigned to existlessness’ をも考慮した、いい訳である。

ところで、内外のどの書も触れないが、この一節は、*Macbeth* から来たのではないかと思う。三人の魔女が消えたあと、Macbeth と Banquo の交わす言葉は、この詩のテーマとも合致している。

*Ban.* The earth hath bubbles, as the water has,

And these are of them.—Whither are they vanish’d ?

*Macb.* Into the air ; and what seem’d corporal,

Melted as breath into the wind. Would they had stay’d !

*Macbeth* I . iii. 79-82

14行の ‘Leaves around me falling’ は、この *Macbeth* の連想の流れにそうものではないか。四面楚歌、やがて妻の死の報せを聞くことになっている Macbeth の言葉である。

I have liv’d long enough : my way of life

Is fall’n into the sere, the yollow leaf;

*Macbeth* V. iii. 22—23.

# 13. Thus I; faltering forward

「木々の葉はあたりによろめき散り」(秋山)、「木の葉がよろめきながら散り」(滝山・橘)、「このように言って私はよろめき出て」(中村)の諸訳は再考を要する。

His Visitor

この詩には、一読ではわからない秘密が隠されているかもしれない。それは、Hardy の後妻になる Florence Dugdale のことである。彼女と Hardy が Enfield で結婚するのは、1914年2月10日（火）である。*The Second Mrs Hardy* によると、式は朝8時に始まって8時20分に終わった。参列者は Hardy の弟の Henry と Florence の父親、それに20歳の Marjorie という娘だけの、隠密裡にとり行なわれたものであった。

この詩には1913年と制作年が明記されている。1914年2月が結婚式だから、Florence とは関係がないようにみえる。しかし、Emma が死ぬ前後から、Florence は Max Gate に関係が深かった。同掲書によると、Emma が死亡した日は、Florence は Hardy に招待されて、*The Trumpet Major* の上演を見るために、Weymouth で滞在していた。電報をうけて、直ちに Max Gate に行った。Gittings は「亡き夫人の召使いたちの憤慨を買った」と加えている。二、三日滞在したあと、Florence は Enfield に帰ったが、Hardy の要請で Max Gate を再訪した。しかし、Emma の姪の Lilian が居て、いたたまれず、また Enfield に帰った。が、1913年正月に今度は決意をかためて、Max Gate の世話をするために、そこに居を構えた。常に Hardy に意地悪な Gittings は、「憤慨した Max Gate の召使いたちはフロレンスはハーディの情婦だと報じ、ドーチェスターの良家の娘はハーディと話をすることを禁じられた」と記している (p. 69)。

とすれば、Emma の幽霊は、この詩に書かれてあるもの以外の最も見たくないものを見た可能性がある。即ち、Florence をである。Hardy は Florence を呼ぶに際して、Lilian を追い出すと言ったと Gittings は記している。ならば、すでに Lilian はいなかったし、第3連の召使いは Florence に属する人たちである。第4連で、Emma の霊が、「メルストックに帰って、二度とここには戻りません」という前に、わざと省かれた、Emma が Florence を見る連があると想像しても不自然ではない。この詩で亡霊は、「あなたと暮した所を見に」来たのに、他のものは見ながら、Hardy その人を見ないことも変である。Hardy はどこに、また Florence はどこに眠っていたのだろうか。表題 'His Visitor' の 'His' は誰から見た「彼の」なのか、俄かにアンビギュアスになる。

### 1. Mellstock

Hardy の小説や詩で、Stinsford は Mellstock と言いかえられている。ここでは、'Your Last Drive' に出てくる Stinsford Churchyard のことである。

### 3. I shall go in the gray, at the passing of the mail-train

Max Gate の下、Stinsford Churchyard の方向3,4百メートルの所にロン

ドンに通じる鉄道が走っている。夜には今でも列車の音がよく聞こえる。亡霊は夜にしか出れないので、朝の郵便列車の時刻には墓に帰るのである。

#### 4. the long familiar door

「永らく親しんだドア」(古川)、「あの長い間親しかった扉」(滝山・橘)は、‘long’を‘familiar’の修飾語にしているが、Max Gate のドアが「長い」のである。

## A Circular

#### 1. As ‘legal representative’

legal representative: 「法律上の代表者《遺言執行者および遺産管理人を元来意味したが、最近親者・相続人・破産管財人・後見人などを意味する》」(研究社大英和辞典)。「as」を滝山・橘訳は「なので」としている。魅力的な解釈だが、月並な「として」を採用した。

以下、‘missive’「公文書、親書」、‘the senders’など、法律用語ないしお役所用語が、悲喜劇的なユーモアとなって、最終連の厳しい事実を包んでいると思う。

#### 4. in tints as shown

「色は御覧の通り」といった、ちらしにつけるきまり文句だろう。O. E. D. の‘colour-printing’の初例は1869年なので、このちらしが、カラー印刷なのか、絵具で着色したものなのか決めがたい。

#### 5. Here figure blouses

「その役を演じている」(古川)、「模様入りのブラウス」(滝山・橘)の両訳とも、‘figure’をとり違えている。‘To represent in a diagram or picture’ (OED) の意だろう。

#### 8. Warranted up to date

これも、広告の決まり文句。

## A Dream or No

詩の最後に、「1913年2月」と付されているので、Hardy が妻の死後、彼女との恋の場に旅する直前の詩である。私の手許にある邦訳は6つのうち、最もすぐれた訳は、最も古い吉原氏の五七調のものだと思う。誤訳をカバー

する詩情が伝わってくる。

### 1. Saint-Juliot

30歳の Hardy が、改修の為に訪ずれ、Emma と出会った教会とその周辺。「セントデュリオ」(吉原)、「サン・ジュリオ」(山本)、「サン・ジュリオ」(藤井)、「サン・ジュリオット」(古川)、「聖ジュリオット」(滝山・橘) とすべて発音が異っている。英国の地名なので、「セント・ジュリオット」(古川) がいいだろう。

### 9. coastward bound

「磯邊づたひにたたづめる乙女子」(吉原)、「海岸で 私は見たのだその人を ひとりたたずむその人を」(山本)、「夜のなぎさにそのひとを ひとりたたずむそのおとめ」(藤井)、「彼女はひとり海辺にむかい佇んだ」(古川)、「私は渚を向いてたたずむ彼女を見つけた」(滝山・橘)。

山本訳をのぞいて、他の訳は ‘coastward bound’ を ‘her’ を修飾するものと解釈しているが、勿論、吉川訳「海辺に向かって行くと」が正しい。具体的には、1870年3月 Hardy が Launceston から St. Juliot まで16マイルを馬車で旅したことを指している。

### 13. (in my thought has it seemed)

「(とわれは思ひぬ)」(吉原)、「(そう私は思っていた)」(山本)、「(そう思えたので)」(藤井)、「(そう思えたが)」(古川)、「(私にはそう思えた)」(滝山・橘)、「(と私には思えたが)」(吉川)。

どうしたことか、全訳とも、‘has seemed’ という現在完了形を無視している。「私」には昔そう思えたし、今もその思いは同じだという意であろう。

### 23. leafed alley

「草深き小徑」(吉原)、「草の小道」(山本)、「牧草茂る小道」(藤井)、「若葉のしげる」(古川)、「葉の茂る小道」(滝山・橘)、「葉の茂る小道」(吉川)。

どの訳からも、喬木の葉でおおわれた、緑のトンネルのような小径が浮んでこないのは私に想像力がないからか? ‘leafed’ は ‘leaf’: ‘To cover with foliage. poet. rare’ (OED) の過去分詞である。‘The wood that leafs the hillside.’ がその例に挙げられている。

### 24. Bos

Bos を Bailey は Boscastle に思われるとし、滝山・橘氏も吉川氏もそれに従っている。しかし、Pinion は Bos を Bossiney Haven と推断し、他の作品で例証している。Pinion が正しいように思う。なぜなら、‘with its flounce flinging mist’ を Boscastle の形容詞にするには無理がある。

## After a Journey

1913年3月6日に、HardyはEmmaとの出会いと恋の地を再訪した。1870年にそこを始めて訪問したのが、3月7日であったから、彼らしいこだわりで、ほぼ同じ時期に今度は弟のHenryを伴っての旅であった。この詩はその旅を歌ったものである。Baileyの言葉、‘The title suggests that the poem was written after his return to Max Gate’に影響されてか、このタイトルの邦訳は、殆んどが、「旅のあと」である。「旅の後で」(藤井)(吉川)、「旅のあと」(古川)(前川)(滝山・橘)。日本語で、旅のあと、といえば、Baileyのように、旅から帰ったあと、という意味以外にとりにくいであろう。滝山・橘氏は、「ペンターガンの入江での瞑想を帰宅後に詩作したもの」とわざわざことわっておられる。前川俊一氏も同じようなコメントをつけておられる。

しかし、多分それは間違っているだろう。「詩歌は静かなところにて想ひ起したる感動なりとかや」という意味合いなら、「旅のあと」で作詩したともいえるであろうが、このタイトルの‘After a Journey’は、日本語の語感では、旅の途中であろう。なぜなら、‘journey’は目的地に行くまでと、目的地から帰るまでと、目的地に行って帰るまでの三つの意味がある。この詩はHardyがCornwallに来てまだそこにいる時を扱っている。詩の最後に、‘Pentargan Bay’と場所を明記したのは、それを明確にする為と思われる。それゆえ私は、「旅にきて」と訳した。唯一、森松健介氏の「ある旅路の果てに」が、私と同じ心の邦題かもしれない。なお、‘Pentargan’は、Ordnance Surveyでは、‘Pentargon’となっている。

### 1. Hereto I come to view a voiceless ghost

‘Hereto’はPentargan Bayのことである。4行の‘the unseen waters’ ejaculations’は、この地の地形による。深く切れこんだ入江のペンターゴン湾は、100メートル(私にはそうみえた)ぐらいの断崖に囲まれて、沖から白波がつねに寄せている。‘unseen’とはその崖が切り立っているので、波濤の音は聞こえても、下は見えないという意である。昼間でも見えない所である。

問題は、この詩を私が読んだとき最初に起った疑問である。一体、Hardyはここを本当に踏破したのか？ 1979年私がそこを訪れたとき、昼間でも、下には降りれなかった。なのに、Hardyは72歳で夜である。あり得ないことと私には思われ、これは想像でのみ書かれた詩であるとしか考えれなかった。従って、‘After a Journey’は、旅のあと、Max Gateに帰って、頭の中で作られたものという考えが強かった。

ところが、Hardy は本当に夜「岸を上り下り」したと思われる。Kenneth Phelps の記述は当時の状況を記録によって再現している。

Did the 72 year old poet spend some hours at night in the cove ?  
 Meteorological records show that, making a break in a spell of unsettled, westerly weather, a ridge of high pressure moved up over Southern England from the 7th to the 9th of March, 1913. The night of Saturday, the 8th, was fine, calm and starlit. The phase of New Moon produced a very low (spring) tide around midnight. Only at low springs are the caves at Pentargon readily accessible. To-day, landslides have made the descent to the beach and caves arduous, even dangerous ; but the present writer can vouch for an easy cliff path existing as late as 1930. One feels sure that Hardy was sufficiently agile in body and young at heart to have made his lone way down the cliff and up again.

(p. 68)

#### 18. At the then fair hour in the then fair weather

‘then’ を 2 回も一文に使っているのは、小さな滝が風に吹かれて空中で消えるところに虹がかかるのは、折よく晴れて、折のよい時刻（それは同時に美しい）でしかないからである。Hardy たちが訪れたとき、そういう好運に恵まれたのである。

#### 19. And the cave just under, with a voice still so hollow

この詩の最良の訳詞は、森松健介氏のものであるが、この個所は意見がわかれる。森松訳は、‘with a voice’ を ‘leading’ の副詞句と考え、‘voice’ を Emma のものととられているが、‘with’ は ‘cave’ を修飾し、‘voice’ は Emma のものではなく、‘cave’ に反響する波の音ではないだろうか。

### Beeny Cliff

Beeny Cliff は、Boscastle から 1 マイルほどの太西洋に面した断崖絶壁である。A *Pair of Blue Eyes* の有名なシーンになる ‘the Cliff without a Name’ は、多分この崖のことであろう。Hardy は Emma とここをしばしば



散歩した。副題の「1870年3月—1913年3月」は、彼の二度の訪問時を表わす。*Life* に、その二度の訪問の記述がある。

*'March 10. (1870) Went with E.L.G. to Beeny Cliff. She on horse-back.... On the cliff.... "The tender grace of a day", etc. The run down to the edge. The coming home. (p. 75)*

On March 6 — almost to a day, forty-three years after his first journey to Cornwall — he started for St. Juliot, putting up at Boscastle, and visiting Pentargan Bay and Beeny Cliff, on which he had not once set foot in the long interval. (p. 361)

# 1. that wandering western sea

「たよたひる西の海」(吉原)、「たゆとう西の海」(山本)、「寄せては返す西の海」(藤井)、「西に漂うあのオパールとサファイア」(古我)、「揺れうごく西の海」(秋山)、「たゆとう西の海」(古川)、「たゆたうあの西の海」(前川)、「たゆとう西国の海」(滝山・橘)、「寄せては返す西の海」(吉川)、「あのたゆたう西の海」(中村)。

全ての訳が美事に「たゆとう」、あるいはその同義語と思われる、「寄せては返す」になっている。‘wandering’: ‘moved, or moving, (idly) to and fro.’ (OED) の意をとったのであろうが、‘sea’ にかける使い方があるのだろうか。この ‘wandering’ は、OED の ‘Of places : out-of-the-way, inaccessible, remote. *Obs. rare.*’ の意味であろう。Obs. rare. の言葉を Hardy が使うことはまれではない。

# 5. In a nether sky

「水平線まで」(山本)、「水平線まで」(藤井)、「=in the sea」(大平)、「低く垂れた空までも」(古川)、「遠く沖合いにつづく」(秋山)、「遠くに見え」(前川)、「空と海の接する所で」(吉川)、等の訳は、間違っているか、イメージがはっきりしない。

素直に「下界で」(滝山・橘)、「下方の空で」(中村)のように訳す方が風景にあっている。Beeny Ciff を歩くと、確かに足下に「下の空」がある。1979年私が歩いていたとき、足の下を、即ち、海面20メートルあたりを、ジェット機が通過して行った。頭上では、二つのハングライダーが際限もなく宙に舞っていた。吉原訳の「下ぎまの眼路に遙けく」は美しい。

## At Castle Boterel

「ボトゥラル城にて」(古川)、「ボーテレルの城で」(秋山)、「ボタレル城で」(滝山・橘)等の訳は誤解を招くだろう。‘Castle Boterel’は、Bascastleを指す Hardy の造語で、「城」ではなく、村の名前である。村に接して、Bottreaux Castle の城跡が存在するのが、地図でも認められる。

### 1. the junction of lane and highway

*Life* に1870年の記述で、下の日記が引用されている。

*March 9.* Drove with Mrs. Holder and Miss Gifford to Boscastle, and on to Tintagel and Penpethy slate-quarries, with a view to the church roofing. (p. 75)

‘highway’は現在の B3263 のことで、Boscastle の下で、丘の上の Boscastle へ登る小道と交わっている。

### 2. the waggonette

1913年でも、自動車ではなくて、馬車であっただろう。‘bedrenches’は、自動車の金属板よりは馬車の素材を暗示している。

### 13. Something...be balked of

大平氏は、「‘Something’は l. 11 の‘what we did as we climbed’と‘what we talked of’とを受ける」と書かれているが、間違いであろう。‘What...of’は大して重要ではないが、‘Something’は重要なのだ、という意である。古川訳も、滝山・橘訳もあいまいだ。藤井訳「理由もなく 希望の絶えるまで／生は犯されることもあるまい／ああ この思いも今は消え」は、理解に苦しむ。‘reason’を「理性」とされている以外は、秋山訳が正しい。

### 16. It filled but a minute.

It=Something. 永遠の一瞬のことである。

### 22. ruled from sight

「『時』の心ない経過の／不屈な過酷さが支配してきたが」(藤井)、「視界のそとに支配している」(秋山)。秋山訳は「実体を...支配している」でまだしもわかるが、藤井訳は‘from sight’をどのように処理しているのだろう？‘rule’は、OED の語義 7 ‘To bring into a certain state by laying down a rule’から派生した意味で使われていると思う。

### 23. the substance...phantom figure

実体と幻影。

## 25. alight

「馬車から降りたときの」(古川)、「降りたった」(秋山)、「車を下りた」(滝山・橘)。Willmott は、‘get down (from the chaise), but also : on fire with love?’ と注をしている。

しかし、藤井訳「あの夜に燃えるのを見たように」の方をとりたい。第3連、‘as we climbed’ とか第4連 ‘we two passed’ をみると、馬車から降りる瞬間以上に時が経過していることが示唆されているし、オーラに囲まれた恋の映像の方が詩に合っているように思う。

## Places

‘Places’ を私はそのまま「場所」と訳したが、「思いでの地」(藤井)、「ゆかりの地」(古川)、「<sup>ゆかり</sup>縁の地」(滝山・橘)の諸訳の方が、内容を示している。

1913年3月に Cornwall を訪れた Hardy は、帰路 Plymouth に立ち寄った。*Life* に Emma についての次の記述がある。

She was born at 10 York Street, Plymouth, and baptized at St. Andrew's Church, being the younger daughter of Mr. J. Attersoll Gifford, a solicitor. She had grown up in a house close to the Hoe, which she used to call ‘the playground of her childhood’. She would relate how, to her terror at first, she was daily dipped as a little girl in the pools under the Hoe; and on its cliffs—very much more rugged than now—had had her youthful adventures, one of which, leaving her clinging to a crag, would have cost her life but for the timely aid of a kind boatman. Her education was carried on at a school for young ladies also overlooking the Hoe's green slopes, where, to use her own words, ‘military drills took place on frequent mornings, and then our dear instructress drew down the blinds’. At nineteen she removed from Plymouth with her parents.

この詩は、Emma が生まれてから、現在の Hardy までをなぞっている。第1連は彼女の生誕、第2連は彼女の19歳まで、第3連は Hardy が彼女に会っ

た30歳の頃、そして第4連で彼女の死の後の詩人の姿を描いて終る。

11. the stammering chimes

cf. 'that tune with its haltings and runs' *Some Recollections*, p. 7.

12. The quaint Old Hundred-and-Thirteenth tune

聖アンドルーズ教会の鐘の曲。詩篇第113篇の最終節は、「又はらみなき婦をんなに家を守らせ、おほくの子女こどものよろこばしき母たらしめ給ふ」で、子供の出来なかった Emma のことを示唆していると思われる。

19. She cantered down

これも、*Some Recollections* にある記述 (p. 35) から発想したものと思われる。

## The Phantom Horsewoman

この詩の奥行きのは深さは、語り手が誰であるか、きわめてアンビギュアスな点にある。Hardy が愛し親しんだ Browning 夫妻の詩の手法を修得して深化したといえはほめすぎだろうか。Bailey は、第1、2連を、'an observant gossip' とし、第3、4連を、'the gossips of Boscastle' が詩人の心の中を見通し、彼の記憶にあずかれば言いそうなこと、としている。

Willmott は、語り手は三通り考えられるとし、それらを、'a sympathetic observer', 'Hardy himself', 及び 'Emma and Hardy engaged in dialogue' としている。そして、第三の語り手の場合、第1連は Hardy の語る最終行をのぞいて Emma が話し、第2連は最終行をうけて、Emma が語り、第3、4連は三人称の形で Hardy が自分自身のことを語っている、とする。

滝山・橘訳は、「ある知人の仕草は奇妙である」で始まる。「(解説)」で、「詩のスピーカーは第三者である」とし、「この詩もスピーカーを第三者の噂話とする技巧が、四一二一二一二一二一二四の強勢にみられる」とされている。日本人が英詩の音をそこまで鑑賞できるのであろうか？ 少なくとも、英米人でさえも、音からそこまで判断することはできないようである。

14. By that briny green

「あの海の青さに」(藤井)、「あの青い海辺で」(古川)、「あの青い海のほとりで」(滝山・橘)。

いずれも、'green' を「海」と捉えているが、この 'green' は、'Grassy ground ;

a grassy spot. Now *rare*.' (OED) の意であろう。l. 26 の 'that shore' のことである。

36. Draws rein and sings to the swing of the tide.

「手綱を引き締め潮の高まりに歌う」(藤井)、「手綱を手にとって／海のうねりに歌いかける」(古川)、「手綱をさばき潮騒に合せて歌う」(滝山・橘)。馬をとめて、波のリズムに合せて歌うのである。

## The Spell of the Rose

Bailey は、1918年12月28日に Hardy が Florence Henniker に出した手紙を引用している。

“As it is an exceptionally mild afternoon I have been gardening a little, & had to tie up a rosebush planted by Emma a month or two before her death: it has grown luxuriously, & she would be pleased if she could know & that I care for it.” (p. 306)

私は、この詩群の注釈に一貫して、Hardy 及び彼周辺の私生活と環境から助けをかりてきた。それほど、この詩群は「私的」な面をもつものともいえよう。‘The Spell of the Rose’ も事実から出発した詩である。

1-7.

第1連は、Hardy が Emma に約束したことを引用符で示している。Hardy は第2連にあるように、Max Gate にこの約束を実現した。ここを、滝山・橘訳は、「わたし 近いうちに小さな館を建てて」で始め、「梨の木も植えるの」で終わっているが、勘違いであろう。「(解説)」で、「エマの切なる願いは、脚韻 a b b c a a b の上にも、四—三—三—四—四—四—三の強勢にも表れている」というのは本当だろうか？

22—28.

この第4連は、黒魔術における呪いの儀式のパロディである。このバラを、呪う相手の人形にすれば、そのまま呪い殺す呪文になるだろう。従って、27、28行は強く訳すべきではないか。「失意の月日も これでおしまい」(古川)、「災いは終りにできるかも」(滝山・橘) では、夜中の、人知れず行なわれる儀式の激しさが伝わってこないと思う。Keats の ‘Isabella; or, The Pot of

Basil' が Hardy の心にあったと推測するのは間違っていようか。同じような発想は、短篇 'A Tragedy of Two Ambitions' にも見られる。

## St Launce's Revisited

Phelps の調査によると、1870年3月7日夜明け前に家を出た Hardy は、Launceston に汽車で午後4時3分に着いた。それから The White Hart Inn で飲物をのみ、馭者と馬を雇って St Juliot Rectory に向った。晴のち曇の午後7時頃に到着した、という。この詩のいう第一回目の St Launce's (=Launceston) 訪問はその時のことを指し、'Revisited' は、1913年3月、Cornwall へ向う途中で立ち寄った時を指す。

この詩で、先達と私の見解のわかれるのは第3連である。

「ここでは下男も女中さえ／なすこともなくただ無為に／酒屋の主人のなんと奇妙で／女給仕のなんとおかしく」(藤井)

「あのころに見かけた／馬丁と馬はすっかり老いこみ／宿の亭主は見知らぬ男／酒場の女中も見知らぬ顔」(秋山)

「ここで会った／御者とやせ馬はいまは土くれ／飲み屋の主も人がかわり／酒をつぐ娘も別の女」(古川)

「当時いた／馬丁と馬は朽ち果てている。／宿の亭主は見知らぬひと／酒場のメイドも見知らぬひと」(前川)

「この馬丁と馬は／よぼよぼしている／酒場の主<sup>あるじ</sup>はなじみでなく／メイドにもなじみがなかった」(滝山・橘)

藤井訳は理解できない。'moulder' の訳は古川、前川が正しい。問題は後半である。'Strange' のとり方であるが、秋山以下みなさんが「見知らぬ」という意に解釈されている。つまり、'the tavern-holder'、'the tap-maid' を再訪の折に会った人物としている。

自然に流れるように読めば、その解釈が当然であろう。しかし、Hardy にしては、あまりに平凡すぎる。私は、この tavern-holder と tap-maid を、1870年3月の人物と考えたい。当時の馭者とやせ馬が朽ちて土になっているなら、そのままの意識の流れで、当時の亭主と酒場女も土にかえっていないだろうか。ネクロフィリック的なところのある Hardy なら、そちらの方もごく自然に考えうる。とすれば、'strange' を異界の、ととることもできよう。あえて、こちらの考えを執りたいと思う。

## Where the Picnic Was

Weber が、このピクニックを、1870年の Emma と行ったものとした見解は、Bailey によって否定され、このピクニックは、Hardy 夫妻と Henry Newbolt と W.B. Yeats によってなされたものという彼の考えが定説となった。*Life* における1912年の記述がその説を裏付けている。

On June 1 at Max Gate they had a pleasant week-end visit from Henry Newbolt and W. B. Yeats, who had been deputed by the Royal Society of Literature to present Hardy with the Society's gold medal on his seventy-second birthday. The two eminent men of letters were the only people entertained at Max Gate for the occasion ; but everything was done as methodically as if there had been a large audience. Hardy says : 'Newbolt wasted on the nearly empty room the best speech he ever made in his life, and Yeats wasted a very good one : mine in returning thanks was as usual a bad one, and the audience was quite properly limited'. (p. 358)

とすれば、このピクニックは1912年6月1日に行なわれたものと考えられる。

### 4. the hill to the sea

Herman Lea は、Ridgeway ではないかと推測し、Bailey も賛同しているが、Pinion は、Culliford Tree も Abbotsbury も考えうるとしている。足の弱った夫人のことを考えれば、Max Gate 近くの Ridgeway がやはり最もありそうに思える。

### 24. Into urban roar

上の背景の続きからいえば、London のこと。

以上、内外の諸先輩を参考にしつつ、私見を述べさせていただいた。私の訳や注解にも誤りがあるかと思う。忌憚なく御指摘下されば、幸甚である。